

空間性と時間性のなかのヨーロッパとイスラーム世界

——地域間交流史の諸相から——

対談：羽田 正氏（東京大学）・深沢 克己氏（東京大学）

司会：堀井 優氏（広島修道大学）

* * *

堀井：西洋史と中東イスラーム史の両方の分野から近世のヨーロッパと中東、また世界全体のいろいろな問題について話していきたいと思います。こういった東と西から相互に乗り入れる形というのは『クリオ』ではめずらしい試みでありまして、中東史と西洋史の両方にとって意義深い企画ではないかと思われま

す。まずはじめに深沢先生よりこの対談の意義についてご説明いただくことになっております。先生、よろしく願いいたします。

深沢：本日はこの『クリオ』の対談の試みに羽田正さんをお呼びすることができて光栄に思っておりますし、また、大変に意義の大きいことではないかと思

います。なぜかと申しますと、今までこの『クリオ』ではしばしば単独のインタビューとか、それからまれに対談も行なわれてきましたけれども、いわゆるイスラーム世界史のご専門の方をお呼びするのは初めてのことだということ、これが第1の理由です。それから第2の理由は、羽田さんはイスラーム方面の専門家、正確にはサファヴィー朝イランのご専門でいらっしゃるわけですがけれども、それにもかかわらず『勲爵士シャルダンの生涯』（中央公論新社、1999年）というタイトルの本をお書きになられて、ヨーロッパとイスラーム世界の双方を視野に納めたご研究があり、その方面で視野の広い仕事をなされている方ですので、そういう羽田さんのお仕事を紹介するという意味でも、この対談が実現したことは私たち西洋史を専門とする研究者にとってとても有意義なことではないか。その意味で、本日羽田さんと対談ができることになりましたのは意義のある、光栄なことだと考えております。

Section 1： 研究の歩み

堀井：ありがとうございました。それでは続けて深沢先生よりこれまでの研究の歩みについてお話しいただけますでしょうか。

深沢：その前に、私と羽田さんのお付き合いについて少しご紹介したほうがよろしいかと思

います。私は一応西洋史家ということになっておりますけれども、ヨーロッパとイスラーム、あるいはアジアとの関わりについてはいろいろな形で関心を持ってまいりました。そういう過程で、羽田さんにご面識を得ることになったので

すが、その最初のきっかけは、1988年から3年間にわたった文部省科学研究費補助金・重点領域研究「イスラームの都市性」というプロジェクトの枠内です。このプロジェクトにもとづく研究会で何度か羽田さんとお会いすることになり、それでお互いに共通の関心を持ち、双方の分野にまたがる勉強をしていることがわかりまして、それ以降、私にとっては大変有益なお付き合いが始まったわけです。その後、文部科学省科学研究費補助金・創成的基礎研究「イスラーム地域研究」の新プロジェクトが立ち上がり、その第5班研究グループに加えていただき、そこで羽田さんのお手伝いをしながらいろいろな仕事をやってきたわけです。その間、羽田さんは、私が連絡役を務める国際商業史研究会の会員になってくださって、半年に一回ごとにこの研究会にずっとご参加いただいているわけですね。そういう風にして、羽田さんといろいろな形で交流が密接になりました。ですから私と羽田さんはここで対談すると申しましても、もうお互い知りすぎていてあまり話すことがないのではないかと、という雑談もいたしましたけれども、しかし、ここは羽田さんのお仕事を『クリオ』の読者に紹介するという意味でも、それから、すでに私たちが知っていることを再確認しながら、今後の研究のプランや歴史研究のあり方について話し合い、それから羽田さんのお考えをうかがうという意味でも、この対談をやってみる価値はあるのではないかと思います。

フランス農業史からフリーメイソンの歴史へ

深沢：さて、それではじめに一応私と羽田さんのこれまでの研究の歩みを大雑把にお話しておいたほうが後の議論のためには有益ではないかと思しますので、それをまず簡単に要約するところから始めたいと思います。

私自身の研究歴を振り返りますと、私は1970年代の半ばに大学院に入学して、その時に最初に取り組んだテーマは19世紀フランスの農業史でありました。その中で特に農学史に焦点を絞って、専門外の人にはほとんど名前を知られていないアドリアン・ド・ガスパランという農学者の農書を分析し、その農学思想についてまとめた、これが私の処女論文です。その後1980年からフランスに留学し、南フランスのエクズ=アン=プロヴァンスにあるプロヴァンス第一大学で、フランス革命史家および心性史家として有名なミシェル・ヴォヴェル先生の指導の下で博士論文を作成しました。それが18世紀フランス=レヴァント貿易史に関わる研究で、そのテーマは、マルセイユとアレppoの間で行なわれたレヴァント製綿布および更紗の貿易です。これがフランス語で公刊された後、このテーマを発展させて、マルセイユの事例にもとづく国際商業史全般へと関心を広げてまいりました。その延長上に、フランスで学位論文を書いていた時にはまだ技術的知識が不十分でよくわからなかった為替手形、つまり信用の問題についてもう少し深めた勉強をしたいという考えが強まりました。そこで取り組んだのが、レヴァントから振り出されてヨーロッパ各地を流通した為替手形の研究です。これも学位論文の時と同じように、主としてマルセイユ商工会議所古文書館の史料を用いて研究し、日本語およびフランス語で論文として公表しました。これら一連の研究を通じて私の関心の中で大きな位置を占めるようになったのが、ディアスポラの問題です。

学位論文を通じて、東方で活躍したアルメニア商人やユダヤ商人、それから為替手形の流通の研究を通じて、アナトリア西部からヨーロッパ全域に散らばり、そこで商業ネットワークを構成したギリシア商人の存在が、史料の分析からほとんど思いがけずに浮かび上がってきた。これがその後の研究にとって原点になったと考えております。それからもう一つはこういう国際商業の拠点として、いわばそのトポスとして重要な意味を持つ港湾都市、つまり港町の研究でした。これはあるとき思い立って、港町を歩き回りながら自分なりに港町の文明史的意義を考えるという作業をしてみました。それをまとめて一冊の本にしたのが、2年前に公刊された『海港と文明』（山川出版社、2002年）という本です。これが第2番目のテーマ。そして、第3番目のテーマは申し上げるまでもなく、フランス=レヴァント貿易史を通じて浮かび上がるヨーロッパとアジア、あるいはキリスト教世界とイスラーム世界、この双方にまたがる技術や人や思想や商品の流通、つまり広い意味での文明交流史、あるいは文明交渉史であり、このテーマをめぐって羽田さんと「イスラーム地域研究」の「地域間交流史の諸相」研究グループに参加して仕事をさせていただいたわけです。

さらにその後、私の関心は先へ進んでおりまして、ここから先はまだ作業の途中、あるいは作業を始めたばかりのテーマですけれども、一つはナント王令 400周年を巡って高まってきた宗教社会史への関心。特に16世紀から18世紀に至るフランスの宗教問題を、それまでのように対立・抑圧・排除の側面からだけ見るのではなく、そうした困難な宗教対立の中で生まれる異宗派共存や宗教平和、そこから醸成される宗教的寛容論の方面に関心が延長されつつあります。それからもう一つのテーマは、この港湾都市論を通じて自分の関心に入ってきた都市計画史と建築史、つまり18世紀の都市改造に始まり、近世のフランス、あるいはヨーロッパで形作られてくる民間建築の様式、そしてそれが都市空間の中で整序されていくシステムを通じて、ヨーロッパ近世・近代都市の問題をもう少し深めて勉強してみたい。これが2番目のテーマ。そして3番目は、商人社会の研究を通じて重要な意味を帯びてきたソシアビリテの問題であり、これは企業形態や事業組織、または取引関係という実利的な側面の社会関係と並行し、あるいはそれと重複する形で作り上げられてゆく、商人たち、または商人も含めた都市住民の社交関係の問題。こうした側面から浮かび上がり、今や私の関心の中心的な位置を占めつつあるのがフリーメイソンの歴史でございまして、これについてはここで深く立ち入りませんが、そのフリーメイソンの歴史を通じて今まで勉強してきた宗教問題、東西の文明交渉、港町の都市社会などの諸問題をもう一度別の側面から捉えなおしてみたいという考えを持っております。その中で、今申し上げたこととの関連では、ヨーロッパにおける他者性の問題、それからヨーロッパとアジア、あるいは世界規模に広がる広域性の問題、そしてその広域性を思想的に支えるコスモポリティスム（コスモポリタニズム）の問題に関心が行きつつあります。なぜそういう方面に進んだのかについては、後ほどまた議論の過程で、機会があればお話ししたいと思います。大雑把に申しまして、このくらいが今まで私がやってきたこと、今考えていることでございます。

「東洋学」的研究から「イスラーム世界」認識の批判へ

堀井：どうもありがとうございました。今深沢先生からこれまでの研究の歩みを紹介していただきましたので、次に、羽田先生のほうからもこれまでのご研究の歩みをお願いします。

羽田：ではどうして今私がここにいるのかということをお話させていただきます。最初にご紹介いただきましたように、私はもともと京都大学の西南アジア史学科で勉強を始めました。当時はいわゆる「シルクロード」ブームで、漠然と、シルクロードのように人々の行き交う場のことを研究したかったのです。最初は、深沢さんとは対照的に、古代のアケメネス朝やサーサーン朝の時代に興味がありました。ところが、学科で必修だったアラビア語やペルシア語を学んだ上で歴史の研究をしようと思ったら、選択肢はイスラーム勃興以降の時代しかありませんでした。西アジアの古代史を本格的に勉強するには、気の遠くなるような厳しい語学的訓練が必要で、しかも史料が限られているという事実を知って、腰が引けてしまったのです。細かい過程は省略しますが、ペルシア語の史料を使った歴史研究を試みようというのが大学院に入った時の私の考えでした。大学院では、文献資料を緻密に読むという「東洋学」的研究手法（歴史学ではなく東洋学です）を叩き込まれました。

その後、博士課程の時に、イラン革命で混乱が続いていたテヘランではなく、当時私が興味を持っていた研究分野で世界的な権威であるジャン・オバン (Jean Aubin) という先生がいるパリに留学することにしました。いまうかがって驚いたのですが、深沢さんと同じ1980年のことです。

深沢：ああ、そうですか。

羽田：ええ。パリでは、16世紀から18世紀に現在のイランとその周辺を領有していたサファヴィー朝という王朝の、軍事制度や政治史について博士論文を書きました。これは東洋学の範疇に入る論文です。この道を歩み続けていたら、深沢さんとの接点は決して生まれなかったでしょう。

その後日本に戻って京都の女子大で3年間教えた後、1989年に突然東京に来ることになりました。フランスではなくイランに留学していたら現在とは相当異なった研究経歴をたどっていたはずですし、東京に来ずに京都にいたらまた全然違っていただいでしょうね。東京に来たとき、丁度さっき深沢さんがおっしゃった「イスラームの都市性」というプロジェクトが行なわれていました。このプロジェクトは、私が所属することになった東大・東文研を事務局にしていたので、「イスラーム都市」という問題についてまじめに考えざるを得なくなりました。それから4年間は毎年夏になると、インドからモロッコまでのいわゆる「イスラーム世界」に出かけ、この地域の都市の建築や歴史を現地を観察しました。その過程でこれまで「イスラーム世界」の都市についてどのような研究がなされ、そこにどんな問題点があるのかということについて何人かの仲間と一緒に考え、議論した結果をまとめて出版したのが『イスラーム都市研究』という本です。これは日本語版（東京大学出版会、1991年）と英語改訂版（Kegan Paul International, London,

1994)の2種類があります。別の国や地域の歴史を研究している人たちと共通の土俵を作って議論することは相当大変でしたが、それだけにやりがいがありました。夜を徹して激論を交わしたことも何度かありました。このとき一緒に仕事をした仲間は、今でも私のもっとも大事な友人たちです。これが2番目の範疇である都市史・建築史関係の仕事です。都市を実際に歩いて見ますと一番目に付くのが宗教建築でした。そこでイスラームの宗教建築について自分なりにまとめてみたいと思い、『モスクが語るイスラム史』（中公新書、1994年）という本を書きました。東京へ来て新しい研究者仲間から刺激を受け、そのうちの何人かと一緒に現地を歩いた末に確信したことは、文献だけで過去を考え、歴史を再構成しようとしてもそこには限界があるということでした。これは当たり前のことですが、文献学の一種だとも言える東洋学から出発した私にとっては新鮮な発見でした。この本はその発見の喜びが形になったもので、ほとんど苦勞せず楽しく書いた記憶があります。

それから、3つ目のテーマが学生時代から関心を持っていた地域間交流史です。これは佐藤次高さん（現在早稲田大学文学部教授）を長にして発足した「イスラーム地域研究」というプロジェクト（1997-2001年度）の枠内で、1999年から3年間私が深沢さんのご協力を得て組織した研究会（「地域間交流史の諸相」）が主たる活動の舞台となりました。深沢さんのご紹介で、村井章介さん（東京大学大学院人文社会系研究科）や荒野泰典さん（立教大学文学部）ら日本の対外交渉史を専門とする先生方が研究協力者として研究会にご参加下さり、ここで他地域の歴史研究者とのおつきあいが一気に広がりました。研究会そのものが、地域間交流、学問間交流そのものであるような楽しい3年間でした。この研究会を母体とする国際会議も2回開催しました。研究会で一番中心的なテーマとなったのが異文化交流の場としての港町でした。これについては、現在、深沢さん、村井さんと私の3人で、シリーズものの出版企画（『港町の世界史』全3巻、青木書店）が進んでいます。

最後の4つ目が、「歴史学とは何か」といういわゆる史学史、学問論です。これも実は今申し上げた「イスラーム地域研究」を遂行してゆく過程で自分なりに考え始めたことです。それから、1999年に東京大学の総長補佐として1年間働いたのですが、その時に知り合った理系の先生方との議論も大きな刺激になりました。同じ大学の中にこれだけ多くの学問が存在する中で、歴史学とは一体どのような位置にあるのか、歴史学の学問的な意味とはどのようなことなのか、「文系」学問の効用とは、といった問題を、理系（といってもいろいろな立場の方がいらっしゃいますが）の先生方に説明し、納得してもらうのは相当大変でした。現在「イスラーム」という言葉を新聞紙上で見ない日はありませんが、「イスラーム世界」の歴史を研究してきた私は、このような現代の状況とどう関わるべきなのでしょう。最近はこのことをかなり真剣に考えています。ついこの前も、こんなことがありました。理系のある先生が、「環境省からイラクの環境復元に協力するプロジェクトを立ち上げるように依頼されたのだが、お前は確かイスラームのことをやっていたはずだから手伝ってくれないか」と電話してきたのです。し

かし、私はそのような問題には全く無力ですから、私に出来たことは、より適任の方を紹介することだけでした。いささか情けなく思いました。それはともかく、この理系の先生の頭の中には、イラクはイスラーム世界の国であり、従って、イスラーム世界の歴史を研究している私は、イラクの環境についてもなにがしか知っているに違いない、という思いこみがあります。自分のこれまでの研究と現代世界とのささやかな接点として、私はこの「イスラーム世界」という一見当たり前に思える世界の切り取り方、別の言い方をすれば、「世界認識」が、いつ頃からどのようにして生まれてきたのかを検証してみようと思っています。そのためには、世界、とりわけ欧米と日本における学問の歴史を調べなければなりません。また、同僚の仕事を批判的に論じなければなりません。なかなか大変なことです。できれば夏頃までにはこの仕事をまとめられればと考えています。このように、私の学問的な興味は一貫せず、いろいろと揺れ動いています。頼りないことですが、ただ、幸いなことに揺れ動いたことによって、深沢さんを含め、多くの魅力的な研究者とお知り合いになれ、さまざまなものの見方を知ることができたように思います。

Section 2 : 地域設定の問題

「ヨーロッパ世界」・「イスラーム世界」観の誕生と近代歴史学

堀井：どうもありがとうございました。都市や港町や商人の研究から、研究者同士の交流や研究者としてのありかたまで、かなりいろいろな話題が出まして、それはあとでまたいろいろと論じていただくことになるかと思いますが、まずは、「地域論」と「時代区分論」という基本的な枠組みの問題から入っていきたいと思います。まず「地域論」についてですが、羽田先生は最近発表されたいくつかの御論文の中で、これまで研究者が自明のように使ってきた「イスラーム世界」という用語やあるいはイスラーム世界とヨーロッパを対立的に捉える考え方に疑問を表明されておられます。「イスラーム世界」や「ヨーロッパ」という言葉をどう捉えるのかについて、お考えをお聞かせ願えればと思います。

羽田：あらためて述べるまでもありませんが、18世紀以前の西方ユーラシアでは、宗教が政治的、社会的に大きな影響力を持っていました。これは「イスラーム世界」でも「キリスト教世界」でも変わりません。従って、後世の私たちがより高い次元から宗教を切り口として世界史を考えようとするれば、18世紀以前の西方ユーラシアでは、一神教を奉じる人々が住む一つの世界が存在していたと考えるべきではないかと思います。「キリスト教世界」と「イスラーム世界」の間に大きな差を見出すことは難しいのではないのでしょうか。周囲をすべてムスリムの政治勢力に取り囲まれた「キリスト教世界」の人々は、自らの住む世界と周囲のムスリムの住む世界をことさらに区別しようと試みましたが、それはあくまでも彼らの世界認識にすぎません。ところが、18世紀後半になりますと、地理的な意味での北西ヨーロッパ地域で、産業革命やフランス革命が起こり、新しい価値観や技術を

取り入れたそれまでとは異なる一つの社会が誕生します。そこでは、社会の世俗化が大きな特徴の一つであり、「進歩」という概念がとりわけ重視されたことにも注目すべきでしょう。その結果、この社会は、新しいもの、優れたもの、進んだものをすべて内包するポジティブな空間として人々の前に立ち現れるのです。これが今日言う「ヨーロッパ世界」です。周辺でこの新しいヨーロッパ的社会の価値を認めそれにあこがれる人々は、何とかして自分もその空間に入り込もうと努力するようになります。18世紀後半に、ロシアが地理的な意味でのヨーロッパの東の境界をドン川からウラル山脈に変更するように主張し、その都のモスクワがヨーロッパの中に含まれるように画策したのはその典型的な例でしょう。価値観は時代によって異なりますから、プラスの意味を持つ価値が時代ごとに「ヨーロッパ」に付加され、新しいヨーロッパ概念が不断に作られてゆきます。現代であれば、人権の尊重や多様性 (diversity) が重要な鍵概念になっているように思います。先日京都で開かれた京大西洋史の21世紀COEプログラム主催による「近世中・東欧における地域とアイデンティティ」というタイトルの国際会議において、あるポーランド人研究者は、「中世においてヨーロッパはキリスト教世界とほぼ同じ意味だ」と述べていました。しかし、現代のEU (ヨーロッパ連合) は、キリスト教的価値をその基本理念としては認めません。多様性という観点から、イスラームやユダヤ教など他の宗教的価値をも尊重するのが、彼らの立場です。ですから、「ヨーロッパ世界」とは何かと問われたら、18世紀後半に誕生し、プラスの意味を持ち、普遍的だと考えられる価値観を人々が自らのアイデンティティとして次々と取り入れてゆく世界としか定義できないのではないのでしょうか。

さて、19世紀になって世俗化をプラスの概念だと考えるようになったヨーロッパの人々は、彼らの周囲を取り巻くムスリムの住む地域を、世俗化せず、科学や進歩を認めない世界とみなし、それを全体として「イスラーム世界」と呼ぶようになりました。このように元来「イスラーム世界」は近代ヨーロッパの人たちのオリエンタリズム的世界観を表す言葉なのです。

19世紀ヨーロッパで成立した近代歴史学は、当時存在したいくつかの国民国家やその総体としてのヨーロッパがいかにしてできあがったかを説明しようとする学問でした。そこで、ヨーロッパについても、過去へ過去へとその起源を遡らせて行きました。民主制のギリシア、共和制のローマがヨーロッパの淵源だと認識され、それらと関連を持ち聖書の世界でもある古代オリエントが自らの歴史の一部に加えられました。地理的には同じ地中海東部を含む「イスラーム世界」は、こうしてその過去を失い、歴史上に突然出現したかのように記されるようになったのです。

現在、国民国家という言葉が、近代ヨーロッパに独特の、非常に時代性を帯びた概念であることは自明となっています。国民国家を正当化するための「正統史学」に荷担するのではなく、そういう「正統史学」がかつてあったのですよ、ということの説明するような歴史学が求められているのではないかと思います。そのためには、歴史を書く単位となる「地域」を相対化しなければなりません。例えば、「はじめにフランスありき」では困るわけです。「ヨーロッパ」について

も同様です。「イスラーム世界」を相対化せねばならないことは言うまでもありません。

堀井：「ヨーロッパ」という言葉に含まれるいろいろな問題を中心にお話しいただきまして、それは当然「イスラーム世界」という言葉に跳ね返ってくる問題でもあるわけですが、「ヨーロッパ史」の研究の立場から「ヨーロッパ」という地域をどういう風に捉えるか、あるいは「ヨーロッパ」から見て東の方をどういう風に捉えるべきなのか、というあたりを深沢先生にうかがいたいと思います。

深沢：まず私自身は、必ずしもヨーロッパ史研究者として自己定義しているわけではありませんが、一応その前提からお話を続けると、最近羽田さんがお書きになられた『イスラーム地域研究の可能性』の中の御論文「東洋学・歴史学とイスラーム地域研究」を読んだ人は、今の羽田さんのお話をよく理解できただろうと思います。この中で羽田さんは、ヨーロッパのことも論じていらっしゃるのですが、どちらかというといわゆるイスラーム地域を焦点にすえてお話をされていて、そこで大変面白い提案をされています。つまり、いわば不連続の歴史というものを想定してみよう、その不連続の歴史が時間の中でどのように積み重なっていくか、これを色付きの透明シートが、いわば無限に積み重なっていくものとして歴史を捉えよう、と。つまり、それぞれの時代によって台紙の上に異なった色で地域が描かれる。そうすると、私たちが現在当然のこととしてある連続性を考えている地域は、実は非常に不均等で、不統一な様々な色で塗り分けられた複数の地域の積み重ねに過ぎない、そういうことをお話されています。羽田さんはここでイランを中心とした西・中央アジアの空間を想定してお考えなのですが、これはもちろんヨーロッパについても、フランスとかポーランドとかの地域概念や国民概念についても言えると思うんですね。

それともう一つは、ヨーロッパの連続性や一体性を前提とした歴史記述をどう批判的に相対化するか、というお話が、この御論文の前半部分で出てくる。歴史学は基本的にヨーロッパ人の自己確認の学問である、と。その場合にはヨーロッパに対する他者としての東洋世界はいわば時間の止まった領域で、これに対比されるべきものとして、時間と共に進展し、進歩してゆく空間としてのヨーロッパ、そういう世界の二分法が、19世紀以降の近代歴史学の暗黙の前提としてあった。これは言われてみれば、例えばヘーゲルの歴史哲学がそうであるし、マルクスの「資本制生産に先行する諸形態」で示された世界観がそうであったわけです。ですから、今羽田さんがおっしゃられた「ヨーロッパ・アイデンティティ」とか、あるいは「ヨーロッパ史」という枠組みに対するご批判は、非常に奥行きが深い議論につながると思います。しかしこの問題は、ヨーロッパとは何かという議論に還元して抽象的な次元でお話しようとする、直ちに收拾のつかない議論になってしまいます。ですから例えば堀井さんが研究されているヴェネツィアとエジプトの関係史とか、そういう様々な次元で問題を考えていく必要があると思います。

ともあれヨーロッパとヨーロッパ外の世界、つまりいわゆる非ヨーロッパ世界、この二つを対比的に論じる見方は、私たち近世史や近代史の研究者にとって一つ

のステレオタイプになっていて、16世紀以降ヨーロッパが全世界規模に拡大し、次第に非ヨーロッパ世界を包摂していったと解釈します。そこにウォラステイン流に言えば「世界システム」が形成されたとか、そういう風な見方をすることに慣れていて、いわゆる「グローバル・ヒストリー」とか「世界システム」という概念を使った場合でも、ヨーロッパと非ヨーロッパの間に隔たりがあり、前者が後者を搾取したり、あるいは前者が後者をエグゾティズムというプリズムの下にいわば他者化していったりするように、両者を截然と分ける視点から論じられる場合が多いですね。その場合に、そこに截然と分つべき何らかの境界線が存在することを前提としている。ただ、私が今考えておりますことは、私たちがそれを自明のものとして考えていたほど、その境界ははっきりとしたものではない。むしろ共通の文法で動いている文明のメカニズムが双方にまたがっている場合が多いと思います。そういう問題を解き明かす視点の一つが、先ほどから話題になっている、羽田さんが組織された「地域間交流史の諸相」というような研究の手法から生まれてくるかもしれない。この「地域間交流史の諸相」では、港町の類型比較という試みも行なわれ、港町における空間の組織とか、周辺世界との関係の編成のあり方を考えてみると、実はヨーロッパと、それからアジアとかインド洋、あるいは南シナ海とか、世界の各地で実は共通の文法の方が重要であり、違いというものは私たちが想像するほど重要ではないかもしれない。そういうことを含めて、ヨーロッパの枠組みを相対化する、あるいは、むしろ思い切って取り払ってみることは、私たちがいわゆるヨーロッパ史研究者がもっと考えてみなければいけないという気はしております。

日本における「イスラーム世界」観念

羽田：近刊の『イスラーム地域研究叢書』第4巻『比較史のアジア：所有・契約・市場・公正』（東京大学出版会、2004年）の序論で、アラブ史研究者の三浦徹さんが面白いことを書いています。中国の広州を訪れたところ、彼がアラブ・イスラーム都市の街区に見られる特徴だと考えていたことの多くがそこでも見られ、ショックを受けたというのです。つまり、今まで「イスラーム的」だと考えられていたことは、より高次の原理で説明できるのかもしれないというわけです。これを読んで、我が意を得たりという思いでした。これまで私たちはあらゆることを「イスラーム」で説明しようとしすぎていたのではないのでしょうか。本当にイスラームで説明でき、説明すべきことと、そうではないことを、もっと厳密に区別すべきだと思います。いまや一般の人々にとって「イスラーム」は「わからない」とほとんど同義語になっていて、「イスラームによれば」と言えば、一般の人は「ああそうですか。イスラームですか。わかりました」と言うのだけれども、実はそれは「わからない」ということがわかったにすぎないのです。

世界史における「イスラーム世界」について言うと、この世界は、ムスリムが統治し、イスラーム法が適用される地域であるとされています。しかし、この定義だと、「イスラーム世界」は空間的に厳密には規定できない。さらに、よく考えてみると、キリスト教にも教会法と呼ばれるものがあります。近代以前のキリ

スト教世界では、この法がかなり厳格に信徒の生活を規定していたのではないでしょう。また、もし上で述べた定義通りに考えるなら、19世紀になって、ヨーロッパ起源の法体系が入ってきた時点で、「イスラーム世界」は滅びたと記述すべきでしょう。しかし実際には、現代に生起する諸事象を説明するのにしばしば「イスラーム世界」という言葉が使われます。このように「イスラーム世界」という語を曖昧に使用している限り、一般の人々の「イスラームは不可解だ」という感覚は決してなくならないと思います。

深沢：先ほど羽田さんが、日本におけるイスラーム観念について話されましたが、私も、日本でいわゆる「イスラーム世界」を研究されている方からお話を聞きたびに、決まって出てくるステレオタイプ、と言っては失礼なんです、表現の一つが、イスラームというのは単なる宗教ではなく、あるいは単なる神学ではなくて、人間の日常生活を律する法律、そして道徳および生活慣習の体系であり、それゆえムスリムの生活の隅々まで行き渡っているのだと、こういうお話なんですね。しかし今日のヨーロッパではたしかに非キリスト教化が進んでいるけれども、かつてのヨーロッパでは事情が異なる。少なくとも私の理解している範囲では、16世紀以降の宗教改革と、それに対する対抗宗教改革またはカトリック宗教改革によって、宗教の日常生活への介入の度合いは飛躍的に高まったと思います。ですから、もし16世紀から17世紀にかけてのヨーロッパ社会の雰囲気を目の前に再現することができたとしたら、今の大多数のイスラーム諸国、サウジアラビアやエジプトよりは当時のヨーロッパの方がはるかに宗教が日常生活の隅々まで行き渡っていたかもしれない。そのあたり、なぜそういうふうに論じることがパターン化したんだろうか。と言いますのは、私自身はそれほど交流は多くないけれども、フランス、トルコ、あるいはシリア、イラク出身の研究者と、これまでいろいろな機会面で面識を得て、討論する機会を持ちましたけれども、彼らはさほどそのことを強調しないように思うんですね。少なくともフランス人があまりそういうことを強調したという記憶はない。これはもしかしたら間違っているかもしれないので、後で羽田さんに訂正していただきたいのですけれども。そういう自分の印象からすると、なぜ日本ではそういうことが特段に強調されるようになったのだろうか、私自身もちょっと疑問に思っているのですが、どうなんでしょうか？

羽田：それに関連してヨーロッパ史研究者の方々をお願いしたいのは、そういう宗教的雰囲気であった世界から、どうして現代のように「世俗化」したヨーロッパ世界が生まれたのかということを知りやすく説明していただきたいということです。これは、ヨーロッパ史研究の大きな課題ではないでしょうか。

それから今お話を聞いた「イスラームは単なる宗教ではない、全てを含み込む体系である」という言説の起源ですが、これはかなり古いと思います。第二次世界大戦直前から戦争中、日本では一時的に「回教圏研究」が盛んになります。その頃、大川周明によって著された『回教概論』（慶應書房、1942年）に、すでにこの言説が記されています。大川がヨーロッパ諸語の文献からこの考え方を引用してきたのは確実でしょう。イスラームの特殊性を強調する言説ですよ。でも、深沢さんがおっしゃったように、元来、キリスト教も含め多くの宗教は、信徒の

生活全般を包み込む一つの体系なのではないでしょうか。イスラームだけが特殊なのではない。ではどうして、イスラームは特殊だと主張するのか。ここでは詳しく述べませんが、この問題は、一方にオリエンタリズムがあり、もう一方ではイスラーム研究者の研究対象への愛情があるという二つの側面から説明できるように思います。

異文化接触と地域間交流——比較史的視点へ

羽田：一つの歴史的な地域としての「ヨーロッパ」が成立した後、ヨーロッパの人々の世界各地への進出に伴って、新しい科学や技術だけではなく、人々が普遍的だと考えた価値観や法体系などが世界中に広がってゆきます。私が現在興味を持っているのは、近代ヨーロッパが生み出したこういったさまざまな要素が、当時の非ヨーロッパ世界——これは現在の中東欧をも含むでしょう——で、どのように受け止められたのかという問題です。反発や融合、積極的な取り込み、拒絶などさまざまな対応が考えられます。いくつかの地域におけるヨーロッパ的要素への反応を比較検討することによって、各地域社会の特徴があぶり出されるのではないかと思います。その意味で私が今有望だと思っているのが、東インド会社の研究です。これまでの東インド会社研究は、主にヨーロッパの経済史的側面から検討されてきました。つまり、会社は何をどれだけ運び、売買していたのか、どこでどれだけ利益をあげたのか、その結果、本国の経済にはどのような影響があったのか、といった類のことです。つまり、ヨーロッパ史の視点からの研究です。しかし、アジア各地の商館における商館員と現地の人々の関わり、具体的には、役人、兵士、通訳、商人、職人、遊女らとヨーロッパ人のつきあいやその結果生じてくる文化接触と摩擦といったアジア諸社会に注目した社会史、文化史的研究はあまりなされていません。例外は日本についてです。長崎に関しては、本当に多くの研究があります。この日本の対外交渉史の成果をうまく利用しながら、比較史研究ができないかと思っています。イギリスの会社はインドに偏っていますが、オランダの会社はうまく具合にアジア各地に商館が散在している上、文書が相当数残っています。オランダ東インド会社関係の資料を使うことが特に重要だと思います。この2月にデン・ハーグへ行って、イランのバンダレ・アッパース商館関係の文書を見てきました。1年分だけで1000頁もありました。一人ではとても扱いきれないほどの量です。でも、やりがいのある仕事ではないかと思っています。

「地域論」と西洋史研究者の課題

深沢：今まで羽田さんのお話をうかがってきて、少し私の感想というか、問題点をまとめてみたいんですが、まず一つ、やはり羽田さんのお話をうかがっていて素晴らしいと思うし、私たちもできる限り見習わなければいけないと思うことは、羽田さんは、ご自分がお考えになって、重要だと思った問題があれば、それが伝統的なイラン史とかサファヴィー朝史の枠組みを超えるか超えないかということ、ほとんど意に介していらっしやらない。つまり何らかの形で保証された専門領域

をつきやぶるということを恐れず、新しい研究領域に挑んでいращやることだと思います。

羽田：深沢さんも一緒じゃないですか、それは。

深沢：それは多分違うと思いますが。ですから長崎にせよ、東インド会社にせよ、これまで私も羽田さんのお話をうかがって驚くことばかりなのですが、次々と新しい領域を開拓されていかれるんですね。これは、なかなか私たち西洋史研究者には、やりたいと思っても普通は踏み切れないところだと思うんですね。もちろんそれは、サファヴィー朝史と、例えば近代イギリス史、近世フランス史、あるいは現代ドイツ史とでは、いろいろな意味で研究環境が違いますが、しかしその違いを考慮した上でも、やはり私たちが見習うべき一つの姿勢じゃないかという気がいたします。これが全体についての感想なんです、少しまとめてみたいと思います。

まず、地域論に戻ると、羽田さんが最終的に東インド会社についての興味に行きついたとおっしゃるその地域論の問題ですが、かつて板垣雄三さんがn地域論というモデルを提示されたときに、地域は全ての歴史記述にとって前提でもあり目的でもあるという意味のことをお書きになっていたと思います。つまり私たちが歴史記述を行なうときに、その枠組みをどこに定めるかは場合によって多様だけれども、いずれにせよ何らかの集合的運命、あるいは集団的進展を描き出す、その枠組みを作る作業でもあるわけですね。だから歴史記述にとって地域を設定するのは本質的な営みだと思うんです。ですからその地域の枠組みをいかにして壊すか、あるいはいかにして再編成するかという羽田さんの問題提起は、西洋史でもいろいろな形で議論されているけれども、ドラスティックな問題提起を含んでいる気がいたします。板垣さんの言われるn地域論は、いわゆる差別の支配構造と、それに対抗する民族の解放運動と、それを上から統御しようとする民族主義のイデオロギーという三者の力の相関関係から地域を抽出しようという考えで、それは部分的には東インド会社の世界にも適用できるかもしれないけれども、基本的には帝国主義の時代をモデルとした議論ですので、私たちが今考えているような19世紀以前の世界には、せいぜい部分的にしかあてはまらない、そのままあてはめたらむしろ危険だろうという気がいたします。ですからn地域論はそのまま使えないとしても、それではどういう形で地域を論じるモデルを設定したらいいかということは、今の羽田さんの問題提起も含めて、私たちヨーロッパ史の研究者がもっと考えるべき問題だろうと思います。

それから、いつ「キリスト教世界」が「ヨーロッパ」になるか。これも大問題で、もちろん私はそれについて何らかのお答えをすべき立場にもないし能力もありませんが、それとの関連で興味を持っていることの一つが、いかにしてヨーロッパが、宗教対立の時代から宗教宥和の時代へと歴史の転換を図るか、それと同時に宗教と世俗政治とをいかに分離するか、いわゆる政教分離、別の言い方をすれば国家理性の独立という課題を、どんな紆余曲折を経て実現していくのか、そして最終的には、啓示宗教を超えた普遍的道徳、あるいは超越的存在への信仰が、どんな道をたどって17-18世紀以降のヨーロッパで成立していくか、このとこ

ろで私はフリーメイソンに関心を持っているわけです。おそらくこの問題を解くには、いくつかの道を準備しなければいけないと思いつつ、私自身はまだ研究を始めたばかりで何も言えないんですが、例えばそういうところから、さっきの羽田さんの問題提起に答える道が見つかるかもしれないと考えております。

Section 3： 時代区分の問題

「商業資本主義」と「長い近世」

堀井：ここで視点を時間の方に移しまして、時代区分について考えてみたいと思います。一般に15世紀末から16世紀初頭にかけての時期は、ヨーロッパ史においてもあるいは中東イスラーム史においても、重要な転換期とみなされておりまして、これに続く約3世紀間が19世紀以降の近代とは区別されて、一般に近世と呼ばれております。西洋史の場合、深沢先生は「商業資本主義」という用語でこの時代を特徴付けていらっしゃるしまして、さらには長期持続の観点から、15世紀から19世紀にかけてを「長い近世」として捉えておられます。そこでまず、この概念について説明いただけますでしょうか。

深沢：先ほど地域概念を設定することと、歴史における集合的運命の枠組みを設定することと同じだというお話をしましたが、時代区分の問題も基本的には同じかなと考えることがあります。つまり私たちの現在を基点にして、この現在が始まるのはいつなのかということから出発し、それに先行する時代をそれとの関連でいかに分節化させて考えていくかというのが、時代区分を構成するのだと思います。その意味で、地域の設定が、歴史的アイデンティティを確定する枠であるのと同じくらいに、時代区分は私たちの歴史的な自己同一性を考える基本的な枠組みだろうと思います。それで今、私が『国際商業』（ミネルヴァ書房、2002年）という編著の序章の中で使った「長い近世」という概念についてご質問があったのですが、正直に申しまして、私はこの概念があらゆる分野において適用可能だとは思っておりません。例えば宗教史の分野では、そういう観念はたぶん成り立たないだろうと思います。言い換えれば、対象とする領域や観点によって様々な時代区分が可能なのですから、私が「長い近世」という概念を使うときは、当面は経済史にのみ適用可能な時代区分だにご理解いただきたいと思います。その場合の「長い近世」とは何か、序章の中ではこれを「商業資本主義の黄金時代」と言い換えてみたのですけれども、ではなぜそれが、おおよそ15世紀から19世紀の半ばくらいまでと想定できるか。いかなる場合にも時代区分は相対的なものに過ぎませんが、その場合でも、やはり何らかの指標または根拠を設定していくことが必要だろうと思います。例えば商人が商品経済、あるいは商品・貨幣流通の全体をコントロールし、有益な利得のチャンスをほぼ独占しているような社会は、おそらくもっと古くにさかのぼるでしょうし、私の著書については、若干の中世史家からそういうコメントもいただいており、私もそのとおりだと思います。少し話をそらせて、イマニュエル・ウォラステインの世界システム論について

言えば、ウォラステインはかなり無造作に 1500 年前後に世界システム、ワールド・エコノミーが成立すると初めのうちは書いていて、それに対して、すでにそれに相当するワールド・エコノミーはそれ以前から存在していると指摘され、その有力なアンチテーゼの一つが、最近翻訳が出たジャネット・アブー・ルゴドの『ヨーロッパ覇権以前 *Before European Hegemony*』（岩波書店、2001 年）だと思っています。アブー・ルゴドは、すでに 13 世紀に、その意味での世界経済が成立している、ただそれは 16 世紀以降のように単一の覇権に集約されるようなものではなく、現在の中東地域、例えばバグダードとかカイロあたりに重心があるけれども、それは単一の覇権というシステムではないという意味で区別していますけれども、少なくともウォラステインが想定した意味での世界システムは、なにも 1500 年に突然現れたものではないという指摘はそのとおりだろうと思います。

そこでお話を戻しまして、仮にヨーロッパを地域概念として採用し、ヨーロッパにおける「長い近世」がもし「商業資本主義」を指標とすると仮定すれば、どうしてそれを 15 世紀から 19 世紀までに設定できるかという根拠を示さなければいけないと思います。私自身は、さしあたって二つの要素を考えています。一つは、中世末期のイタリアにおける商業技術革新、いわゆる「商業技術の三大発明」と言われるもので、これはご承知のとおり、為替手形・複式簿記・海上保険の発明です。もちろんこの中で為替手形は必ずしもイタリアで発明されたわけではなく、カイロの「ゲニザ文書」の中にイスラーム世界のユダヤ商人などが用いた為替手形と同じ機能を持つ文書が確認されているそうですし、その意味では必ずしもイタリア起源とは言えない。ただそれが、ヨーロッパの非常に広い範囲で流通するようになり、商業経済にとって不可欠の道具になるのは 14 世紀以降のイタリアからであり、そこから徐々にヨーロッパ各地に普及していく。これに対して複式簿記はおそらくイタリアの発明と考えられ、ヴェネツィア式簿記とも呼ばれました。それに加えて中世末期のフィレンツェで発生した海上保険。これら 3 つが出揃うことによって、遠隔地商人の企業経営が合理的な経営計算の上に成立するようになる。つまり資本とか利潤とかの観念が成立し、合理的に計算可能な要素になるという意味で、やはりそれ以前の時代とは性格が異なるというのが第一の理由です。

第二の理由は、これは誰もが知っている「大航海時代」であり、ヨーロッパ人が全世界に進出することによりヨーロッパ商業経済に新しい段階が訪れた。ただこれについて一つ留保しなければいけないのは、それは何も 15 世紀末に突如として起こったわけではなく、中世末期の長いプロセスによって徐々に実現されていたということです。それは北方ではアイスランドからニューファンドランド、カナダ沿岸にかけて、それから南方ではマデイラ島からカナリア諸島、さらに西アフリカ、ギニア湾沿岸へと、徐々に進行するいわゆるヨーロッパ世界の拡大というプロセスの、長い連続性の中で捉えなければいけないと思います。これら 2 つの要因が重なって、15 世紀中葉以降、ヨーロッパ商業経済と、それが社会全体の中に占める比重に大きな変化が現れたのではないかと考えています。もちろんこれは当面の仮説であって、それが絶対的なものだと主張するつもりはありません。

ん。それではいつ、その「長い近世」が終わるかと言え、これは『海港と文明』の第5章でも書いたことですが、いわゆる商人資本・商業資本の優越を支えた根拠の一つは、商業資本主義の多面性または多元性だと思います。つまり商人が狭い意味での商業だけでなく、海上保険業、銀行業、海運業、さらには製造業などの多様な経済活動を手中に収めていた事実があり、それが都市社会における彼らの優越的な地位を保証していた。ですから19世紀前半のバルザックの時代まで、商人 *négociant* という職業は、製造業者 *fabricant* という職業より社会的prestigeがはるかに高かったわけです。この事業の多面性と支配的地位とが、様々な経済的・社会的な環境の変化によって崩壊するのが、19世紀後半からベル・エポックにかけてだろう。この時に商人の優越性、および商業資本主義と呼ぶことのできる現象に終止符が打たれる。これが経済的側面から考えた時代区分です。ただはじめにお断りしたように、これが歴史記述の全分野にわたって適用可能だとは思っておりませんし、多くの通説で言われるように、例えば思想史や文化史の分野では、18世紀中葉が大きな転換点になるということも事実ですから、時代区分は多様であるべきだと考えています。

地域区分にもとづく時代区分の射程と限界

深沢：それで私がよくわからないし、羽田さんや堀井さんにおうかがいしたいと思っていることの一つは、今申し上げたことはあくまでもヨーロッパを基準として提示した時代区分ですが、それも含めて、ヨーロッパの時代区分と、中東・アラブ諸地域、あるいはイランなど中央・西アジア地域の時代区分とがどんな関係に立つか、そこではどこまでが共通の時代区分として適用可能なのか、どこからが決定的に不適切なものになるのか。そのあたりのことを少しお話をうかがいながら考えてみたいと思っていますのですけれども。

堀井：わかりました。では次に東側からも考えてみたいと思います。私の場合は東地中海という地域をやっております、もともと北半分と南半分にわかれて歴史的な過程が進行していたのが、16世紀の前半にオスマン朝がマムルーク朝領を併合したことによって、ほぼ全域がオスマン化するというイメージを持っております。アラビア語の年代記とかオスマン朝の法令集、それからヴェネツィア史料を検討してみると、行政のオスマン化が進行すると同時に、ヴェネツィア商人の貿易のあり方も変わり、それまでレヴァント貿易の主導権を握っていたヨーロッパ商人に対してオスマン臣民が大きな競争相手として現れてくる。このあたりがその後長期的に持続する一つの近世的な特徴の先駆けと言えるのではないかというような展望を持っております。

さしあたり私の非常に限定的なイメージをお話しさせていただきましたが、羽田先生はサファヴィー朝の研究から出発されて、サファヴィー朝とオスマン朝とムガル帝国、3つのイスラーム国家の比較論についてもお書きになっておられますし、またそれと同じ頃のヨーロッパから中東「イスラーム世界」——カッコつきの「イスラーム世界」であります——にかけて活躍したシャルダンという商人が見た世界についてもお書きになっておられますので、「近世」という時代

区分があるのか、ありうるとすればどういった形で捉えることができるのか、そのあたりの時代の捉え方のイメージといったことについてお話しいただければと思います。

羽田：堀井さんは、「オスマン化」ということを非常に重視されましたが、これはあくまで政治の話ですよ？

堀井：ええ、政治の話です。

羽田：最初に深沢さんがお話になった経済的な意味での時代区分ではないですよ。

堀井：ええ。

羽田：そこのところがちょっと、うまくかみ合っていないんじゃないかと思いましたがけれども。

堀井：すみません...

羽田：それで、その「商業技術の三大発明」のうちの為替手形は、さっきゲニザ文書の話がありましたが、確実にその頃には存在しているわけですよ。それから海上保険が中東や西アジアに存在しなかったとは考えにくいですね。8世紀頃にアラブやイランの商人が中国まで行くときに、保険も何もなしに旅立ったとは思えません。

深沢：西洋の時代区分で言うと中世、いつごろかは正確に思い出せないのですが、インド洋にはビマ bima という制度があり、これが海上保険に相当する制度だと言われていますね。

羽田：ああ、そうですか。それは私は知りませんでした。複式簿記についてはまったくわかりませんが、あとの二つはヨーロッパより早く中東やインド洋世界に存在していたと考えてよいのではないのでしょうか。

深沢：そうですね。ですからヨーロッパを基準としないで、例えばインド洋、イスラーム、地中海世界という枠組みで考えたならば、時代区分はまた変わってくる。そこがまさにヨーロッパ式の時代区分と、アジアやアフリカ世界の時代区分とをつき合せて見る必要の一つだと思うのです。

羽田：おっしゃるとおりだと思います。例えばフェルナン・ブローデルに『地中海』という研究があります。ブローデル自身は、後半生には、ヨーロッパとかフランスとかにアイデンティティを求めようになりますけれども、この本がかかれた時点ではおそらく、そういうものを相対化するような一つの地域として「地中海世界」を想定しています。地中海世界では為替手形は「ヨーロッパ」でそれが使われるより前から存在していました。「ヨーロッパ」を中世から続く一つの地域として想定し、その経済史を考えた場合には、さっきおっしゃった時代区分は有効であるし、意味があると思いますけれども、もし、「地中海世界」という単位で時代区分するなら、異なったメルクマールが必要になりそうですね。その場合に何を基準とするかということを実際に考えてみる必要があります。

王朝史という枠組みの相対化

羽田：いわゆる「イスラーム世界史」の分野では、王朝による時代区分がしばしば行なわれます。例えば「オスマン朝時代」「サファヴィー朝時代」といった具合です。

しかし、私は、これはもうやめた方がよいと思うようになりました。特に、「オスマン朝」を一つの単位とすれば、「トルコ人」は我々とは別のあちら側の人間であるというヨーロッパの人々の考え方をそのまま踏襲することになりかねません。たとえオスマン朝という政治勢力があったことは事実だとしても、これがその勢力下に入った人々に対してどれだけ強制力を持ち、また人々はこの政治勢力にどれだけのアタッチメントを持ったかという問題は、慎重に考えるべきことではないでしょうか。例えば、エジプトの場合、オスマン朝はマムルーク朝を滅ぼしますが、マムルークという存在自体は19世紀まで残るわけです。オスマン朝のエジプト征服によって、一般の人々の生活環境がどのように変わったのかをあらためて調べてみなければならぬと思います。私は、これからは人々の生態や自然環境を基準として地域を設定すればよいと思います。伝統史学の領域で「天下国家」を論じているだけでは十分ではないのです。「地中海世界」という自然環境や人間の生態を重視した地域設定と、「オスマン朝」という政治史重視の地域設定は、その意味で位相を異にしているのです。地中海世界の東端がおよそユーフラテス川付近で、それより東のアナトリア東部、イラン高原から中央アジアにかけての地域が、遊牧民の活躍するまた別の世界というように考えてみればどうでしょう。

堀井：イスラーム史研究において非常に大きな問題を指摘されたと思います。私のものを含め、多くの研究は王朝史の枠組みでなされていますが、たしかに王朝というのは上層の部分でありまして、支配される側の観点からしますと、いろいろな見方があるかと思われまます。ところで先生はかつて、「東方イスラーム世界」という地域区分を提唱され、王朝の交代よりはむしろ、連続的に現れる遊牧政権という特徴を重視なさっておられますが、それは先ほどおっしゃった生態的な・・・

羽田：あの頃はそこまで深く考えていませんでした。

堀井：やはりつながってはいるんですか。

羽田：今から考えると「東方イスラーム世界」という表現はよくなかったと思うんだけど、王朝や現在の国民国家の枠組みとは違う一つの歴史的な地域があったと考えた点は、間違っていないかと思っています。

現在という視座と時代区分

深沢：はじめに申し上げたことなのですが、私たちが考える時代区分は、本質的には現在の我々が、現代というものがいつ始まったか、というところに端を発しているのだらうと思います。19世紀以降の知識人たちの問いからすれば、自分たちが近代と考える時代がいつ始まったのか。これは19世紀から長らく続いた観念に従えば、16世紀あたりに始まることとなります。しかし19世紀の人々にとっては、そうした考え方にリアリティがあったとしても、現在21世紀初頭にたつ我々にとって、依然として有効な時代区分であるかどうか。つまり我々の時代がいつ始まるかと問うことによって、我々の時代が始まる以前の歴史がどういう風に分節化されるのかが二次的に決定されてくると思います。先ほど私が「長い近世」という時代区分について説明したときに、これは当面経済的な視点から申し

上げたわけですから、その意味での自己限定を強調したわけですが、もちろん一つの時代区分を仮説として設定する作業は、そこにある程度の一般化可能な性格を感じていなければできないわけです。それにはいくつかの理由を付け加えることができますと思いますが、一つだけ申し上げると、例えばヨーロッパの都市景観が決定的に変わってくるのはいつかという問題です。19世紀のいわゆる折衷主義建築や、あるいは新古典主義建築などについて、建築趣味のあるフランス人はいろいろと悪口も言うし、第二帝政期のオスマン計画による都市改造は、それまでの伝統的な都市観念を否定する側面があるようですけれども、ただ私の目からみると、基本的にヨーロッパ都市の景観は、19世紀末までは変わっていないんじゃないか。それから建築様式という点でも、いろいろな要素が付け加わったり、古いものが復活させられたりするけれども、19世紀末までは本質的に変わっていない。それが決定的に変わるのは、鉄筋コンクリートの導入と前後して、いわゆる機能主義または近代主義建築が始まる時期、つまり19世紀末か20世紀初頭以降ではないかと思います。つまり、いま私たちが目の前にしている世界がいつ始まるかという考え方について、19世紀の人たちが16世紀に出発点を見出すのはある意味では自然なことだったけれども、現在から見ると、すでに私たちがずいぶん遠いところまで来てしまったという感覚はたぶんあるだろう。そこから時代区分を見直してみると、例えばそういう提案も可能ではないかという気持ちはあります。

それに関連してもう一つ申しますと、私は歴史の専門家ではない、普通のフランス人と雑談するのが好きなんですけれども、そういうときに私が17世紀や18世紀の歴史を勉強していますと言うと、「ああ、それは中世ですね」と言われることが多いです。それもかなりインテリのフランス人がそういう言い方をすることがある。médiéval と言うんですね。つまり今現在のフランス人の感覚からいうと、例えばシャルルマーニュもルイ14世も同じなんですね、王様ですから。王冠を被って玉座にふんぞり返っている王様がいた時代は、今のフランス人の感覚からいうと中世 médiéval なんですね。だからそれが近代 moderne だという考え方は、なかなか理解しにくい面があると思います。これは素人だからそういう間違いをすと言って笑ってしまえばそれだけですけれども、そういう意識の変化はやはり歴史家の感性の中に取り込んでもいいんじゃないかという気がします。ですから中世史の専門家は、中世という時代が15世紀か16世紀で終わると議論の立て方をする例が多いようですが、仮にもっと新しい時期、例えば19世紀の後半あたりからようやく我々の時代らしくなってくるとすれば、むしろ中世と近世の連続性を重視した方が、これからの現代世界の置かれた環境には適合するかもしれない。ですからそういう意味で、先ほどから羽田さんと話題になっている時代区分の仕方を経済的視点からだけでなく、いろいろな視点から考え直してみる必要があるのではないかと考えました。

ムスリムの歴史観

堀井：現地の人にとって、おそらくオスマン帝国時代は特別な意味を持ちますけ

れども、アラブ人、イラン人の場合にはどうなるのでしょうか。アラブ人の場合エジプトでは、やはり近代のムハンマド・アリー朝が始まってからかなりがらっと変わったというイメージを、伝統的に持っていて、それ以前は中世だと考えているようです。ただ16-18世紀は彼らにとってもよくわかっていない時期であって、それを埋めなくてはいけないという問題意識を研究者は持っている。これは史料が意外とたくさん残っているということもあるんですが、オスマン支配時代の研究がかなり急速にエジプトで進んでいるということがあります。

羽田：それは自分たちのアイデンティティ発見ですよ。まさに「エジプト史」の構築です。イランではやはりイスラーム以前のアケメネス朝やサーサーン朝にアイデンティティを感じている人が多いと思います。「イスラーム世界史」を設定した場合、イスラーム以前の時代をどのようにそれと関連づけるかが難しいところです。それから、これは意外と知られていないことなので念のために申し上げますと、ヨーロッパで19世紀に近代的な意味での世界史が成立する以前にも、いわゆるキリスト教的世界史が存在していました。キリスト教的世界史とは、アダムとイブから始まる世界史です。実はこれはイスラームでも同じなのです。歴史はムハンマドから始まるわけではありません。アダムとイブから始まり、そこから順番に枝わかれして、世界中にいろいろな人々が散らばってゆくのです。キリスト教的世界史が相対化され、ヨーロッパ起源の新たな歴史意識が入ってくる前には、中東のムスリムは、イスラーム世界とその他をはっきりと分離した形の世界史観を持っていたわけではないのです。ムスリムも非ムスリムも、遡れば皆祖を同じくするわけです。ヨーロッパという言葉は知られていましたが、ほとんど使われません。ヨーロッパ対イスラーム世界という枠組みで世界を捉えてないのですから。

深沢：つまり言い換えると、敬虔なイスラーム教徒、ムスリムの意識の中でも、ムハンマド以前と以後とで歴史の断絶はないということなんですね。

羽田：ええ。ノアもモーセもイエスもみんな預言者であり、ムハンマドは一連の預言者の最後に位置するというわけなのですから。

深沢：ところが我々の歴史記述だと、いわゆるイスラーム世界の記述はムハンマドから始まるんですね。

羽田：そうなんです。何かちょっとおかしな感じです。それはなぜかという、やはりヨーロッパ史が先にあって、ヨーロッパ史ではどうしてもイスラーム以前の中近東は必要な部分なのです。まず聖書の地ですし、「ギリシア・ローマ文明」に大きな影響を与えた文明の地ですから。逆に「イスラーム世界」は自分たちとは対立する別の文明だと認識しているから、古代オリエント世界とイスラーム世界の間に大きな切れ目が出来てしまうことになります。これは近代ヨーロッパによる歴史解釈に過ぎないと思います。

堀井：ムスリム自身は、ムハンマドが出現する以前と以後とで何らかの時間の連続の意識を持っていて、それは人類史の一つの捉え方としてありうるんじゃないかと思うわけですがけれども、それをそのまま我々が受け入れて、中東とかオリエント、なかなかうまく言えないですけども、一つの地域の歴史を捉えることはで

きないですよ。そうするとどういふふうな...

羽田：私は、ヨーロッパの人たちやムスリムの伝統的な歴史意識を「こういう歴史のとらえ方もあるのだな」と理解し、相対化した上で、新しい地域区分を考えればよいと思います。「イスラーム」で地域をくくるのではなく、先ほどから言っているように、人々の生態や自然環境を要素とした地域区分です。

堀井：時代区分論から始めて、地域論にまでいきまして、両者は密接に関わっているのだということがわかりました。

Section 4： 今後の展望

堀井：ここまで一般論的な議論が続きましたので、これからもう少し具体的な研究の話に進みたいと思います。先ほど最初に深沢先生からお話がありましたが、羽田先生は2002年3月に終了したプロジェクト「イスラーム地域研究」の第5班bグループ「地域間交流史の諸相」の代表を務めておられまして、これには深沢先生が組織されている国際商業史研究会がジョイントする形で活動しておりました。このプロジェクトで2001年に木更津で国際シンポジウムが開かれた時、第5班bグループは「港、商人、異文化接触 Ports, merchants and cross-cultural contacts」という題のセッションを組織し、羽田先生、深沢先生ほか何人かの研究者——僭越ながら私も——による報告という形で成果の発表もなされました。このような成果をもとに、今後どのようにして研究を発展させていくかについて、今一番興味をお持ちのテーマを中心にしてお話ししたいと思っています。では羽田先生からお願いします。

地域間交流の実相解明へ...東インド会社研究と「シャルダン文書」研究

羽田：先ほど申し上げたように、東インド会社の史料を使って地域間交流の実相を描いてみたいと思っています。交流には、ヨーロッパの人たちとアジア各地の人々、アジア各地の人々同士という二通りがありますが、いずれにせよ比較の手法を取り入れながら、ということになります。とりわけ、日本の長崎における経験を、比較のものさしとして利用したいですね。具体的には、国際的な紛争が起こった場合に、それはどのように解決されたのかということ、また、東インド会社に勤める通訳や仲買人（ブローカー）、それに会社と取引をする商人はどのようなアイデンティティを持っていたのかということ、西アジアにおける近代的な意味での「国家」や国籍の起源やその理解のされ方などでしょうか。

それからもう一つは、「シャルダン文書」を用いた研究です。幸いにして去年の夏にイェール大学へ行って文書を詳しく調べる機会がありました。次回の国際商業史研究会で報告させていただくつもりですが、全部で710点の文書のうちで、勲爵士シャルダンに関わるものの数は限られています。全部で数十点でしょうか。残りの600点以上は、ジャン・シャルダンの弟で17世紀末から18世紀初めにかけてマドラスに住んだダニエルとその妻に関係するものです。とりわけ、妻マリ・

マグドゥレーヌに関する文書は、おそらく400点以上あると思います。この人は、夫ダニエルの死後イギリスへ戻るのでありますが、文書の中には彼女のイギリスでの生活をうかがい知ることができるものもたくさんあります。細々とした日常の食料や衣料の納品書や領収書などが多いです。この「シャルダン文書」を全面的に活用して、マドラスにおけるダニエル・シャルダン夫妻の生活を再現してみたいと思っています。フランスの拠点ボンディシェリではなく、イギリスの拠点であるマドラスで、フランス生まれのユグノであり東インド会社の職員ではない一私商人のダニエルは、現地社会と関わりながらどのようなアイデンティティを持って暮らしたのでしょうか。残念ながら、文書はダニエル夫妻と現地のインド人社会との関わりを私が期待していたほどには直接的に明らかにしてくれないようなのですが、それでも結構面白い個人史が書けるのではないかと考えています。

深沢：一番最後におっしゃったダニエル・シャルダンと現地社会との直接の関わりがほとんどないというお話なんですが、それは史料として残っていないということなのか、実際になかったらと推定されるのか。

羽田：もちろん、関係がなかったわけではなくて、おそらくブローカーを使っていたのだと思います。ただし、彼が扱っていた主要な商品は現地のマドラスにいるヨーロッパ人の人たち向けです。報告までにはもう少しつめておきますが、現地社会よりも現地のヨーロッパ人社会と非常に接触が多かった人だという印象です。

深沢：今のお話について、彼の扱った商品がヨーロッパ人向けだというのは、これはイギリス東インド会社の場合でも、オランダ東インド会社の場合でも考えなければいけない重要な問題が指摘されていて、例えばイギリスからインドに向けて繊維製品やフランス産ワインが輸出される場合に、そのほとんどが現地に駐在する東インド会社従業員または軍隊の消費用だったと言われていています。ですから貿易統計だけを用いて、貿易収支構造を論じるのは相当に危険だという一例になります。ちなみに今現在パリ第4大学に留学して博士論文を準備されている日本人の若手研究者で、野澤文二さんという人がいます。学部は立教大学で、マスターコースをロンドン大学で学んでマスターをとり、今度はフランスへ留学してDEA論文を書いて、現在博士論文を準備中という、非常に大胆な研究の道を行く人です。その方のDEA論文を拝見すると、その研究テーマが面白くて、オランダ東インド会社がフランスのボルドーから輸入したワインを長崎に輸出しているのですが、この長崎に輸出されたボルドーワインの研究が論文のテーマで、おそらくその延長上に博士論文を準備されていると思います。例えばそんなふうに、単純に貿易統計だけをみると、アジア向け輸出がこれだけ、アジアからの輸入がこれだけで貿易構造がどうという議論になるわけですが、実態は、輸出が現地のヨーロッパ人向けである場合に、貿易構造から単純にヨーロッパ=アジア間の経済的関係を判断することは危険だと思います。ですから今のダニエル・シャルダンのお話も、うかがっていてそういう問題を思い出させてくれる一例だと思います。それから二番目に、現地の人たちとあまり関わりはない、ただしブローカーは別だったろうというお話ですが、私の知っている範囲では、18世紀のマドラスにはアルメニア人が多いんですね。彼らが通訳およびブローカーを兼ね

た仕事をしていたという記述を読んだことがあります。例えばダニエル・シャルダンとアルメニア商人との関わりは、文書を通じて出てくるのでしょうか。

羽田：いま、正確な数字を思い出せませんが、710点の文書の中にアルメニア語で書かれたものが1点か2点ありました。そもそも、ダニエルの兄の旅行記作者ジャン・シャルダンは、アルメニア商人とイギリス東インド会社の間を取り持っていた人です。アルメニア商人とは大いに関わりがあったのです。ダニエルが兄とアルメニア商人とのネットワークを活用しただろうことは間違いありません。

堀井：たしかご著書の中では、シャルダンは東インド会社の文書では「アルメニア人代理人」と呼ばれていたように記憶していますが。

羽田：そうですね。

深沢：それから三番目にお聞きしたいのは、ダニエル・シャルダンは扱った商品が、主としてヨーロッパ人向けのものだったという場合に、これは東インド会社からの輸出品に関わるのでしょうか。

羽田：東インド会社とシャルダン兄弟は別に商売をやっているわけです。彼らは東インド会社の船の船倉の一部を借りているのです。兄のジャン・シャルダンは東インド会社の株主ですから、その権利があるわけです。イギリスからどういうものを送ったかですが、かつら、扇、書籍、ワイン、衣服、リボンなどがすぐに思い浮かびます。すべてヨーロッパ人向けでしょう。

深沢：そうするとその売上代金、帰り荷はどういう形態で。

羽田：帰り荷はダイヤです。それ以外については、帰り荷ではなく、帳簿上は現地でお金を貯めておく形になっていたようです。

深沢：そうすると少なくともダイヤモンド、いわゆるゴルコンダのダイヤモンドを買うためには、現地の商人社会と間接的にせよ関わりを持つわけですか。

羽田：ゴルコンダのダイヤモンドを買うには、ユダヤ系の商人を使っています。ユダヤ系の商人がゴルコンダに住みこんでいて、この人が実際の買い付けをやっていたようです。

深沢：するとユダヤ商人がかなり内陸にまで入り込んでいたことになる。

羽田：そうですね。この人に関して言えば、現地の女性と結婚していましたから、内陸まで行っちゃったんでしょう。例外なのかもしれませんが、よくわかりません。

それからもう一つダニエルという人のおもしろいのは、船を自分で購入し、アジア域内交易に活用しているという点です。船一隻を丸ごと買った場合と、何人かで共有の船主になった場合があります。広東にも船を出していますし、かなり手広くやっていたようです。

おもしろいのは何人かで組んで船を購入するときの船主リストがあるのですが、そこに現地系、つまりインド系の人名が二三人見られます。ヨーロッパ系の人たちと現地の人たちは截然とわかれて活動していたわけではなさそうなのです。

深沢：今おっしゃった、リストの中にインド人らしき人名があるというのは、例えば船舶共有組合みたいな形で、共同船主または持分保有者になっているということですか。

羽田：そのとおりです。

深沢：つまりジャン・シャルダンのようなヨーロッパ人に混じって、もしかしたらアルメニア人などと並んで、共同事業者としてインド人らしき人の名前があるということですね。

羽田：そうです。ヨーロッパ人と現地人というように、明確に分けて把握しない方がよいのかもしれませんが。バンダレ・アッパーズというペルシアの港町の場合には、ヨーロッパ系とアジア系は大いに入り混じっており、フランス人が現地の人が持っている船の船長をやっていたり、オランダ系の人々が現地政治勢力の一つの部隊の指揮官であったり、ポルトガル人のムスリムが現地の政権の通訳をやっていたり、ヒンドゥー教徒であった人がムスリムに転向してバンダレ・アッパーズの城砦の長官になったりと、「何でもあり」のような状態です。もちろん、メスティーソという混血の問題もあります。

深沢：そういう行動様式について、例えばイギリス人とオランダ人、そしてフランス人とポルトガル人のあいだで、アジアでの行動様式に違いがあるとお感じになりますか。

羽田：ポルトガル人については、現地社会と混血する割合が高いということが言われていますよね。

深沢：典型的なのはブラジル。

羽田：そうですね。

深沢：それから西アフリカでも、ランサドス *lançados* と言われる人たちがいて、これはアフリカ人との混血児です。通常のポルトガル人ですと、あのアフリカの熱帯雨林気候に耐えられなくて、皆早死にしてしまうわけですが、ランサドスは肉体的にも文化的にも適応能力が高い。ですからこういう人たちが現地との仲介役として活躍していくわけです。

羽田：オランダについては、バタフィアでは、現地の人とのつきあいは禁止であったはずですが、現実にはオープンです。もちろん日本の場合も例外ではなくて、荒野泰典さんによると、16世紀後半以後日本にやってきたヨーロッパ人男性のうちで、日本人女性と関係を持たなかった人はほとんどいないとのこと。ただし、長崎丸山の遊女のうちで、オランダ人とつきあうのは一番格の低い人だったそうです。日本人とつきあう人が一番格が高く、次いで中国人、最後がオランダ人というわけです。

深沢：なぜそういう価値意識が生まれたのか。

羽田：そうですね。

深沢：それとオランダ東インド会社の場合、考えておかなければいけないのは、さっきイギリス人とかオランダ人ということの大雑把に申しましたが、実は17世紀から18世紀になると、オランダ東インド会社の乗組員の大多数がオランダ人ではなくなっています。乗組員の多く、特に水夫については大多数が移民で、ドイツやスカンジナビアからきたルター派信徒です。だから長崎の出島に出入りしたオランダ東インド会社乗組員たちのかなりの数は、実はオランダ人ではなくて、むしろドイツ人やスカンジナビア人だった事実も考えておかないといけないと思いますね。

羽田：日本の場合、オランダ人は女性を連れて来てはいけなかったということはよく知られていると思います。幕府がそれを禁止するのです。これはおもしろいところで、だから必ず男性は独身で来るわけですよ、奥さんがいたって。奥さんを連れて行って、駄目と言われて追いつ返された例もありますね。日本の場合は土地つきの政治権力がかなり強いんですね。出島も、あくまでも日本の土地の上にオランダ人が家を借りているわけです。それに対してインドのマドラスの場合は、イギリスはその土地を完全に譲り受けています。そこは自分たちの土地ですから、女性を連れて行こうと構わないわけですね。最初に申し上げたことに戻りますけれども、こういった意味で地域間比較を試みるのは大変興味深いと思っています。

深沢：女性を同行させてはいけない、結婚していても妻が同行してはいけないという禁令については、オスマン帝国の商港におけるフランス人の境遇も同じですね。イギリス人の条件も基本的に同じですが、フランス人の場合は、女性を同行させてはいけないだけでなく、現地での結婚も原則として禁止されます。

羽田：オスマン帝国政府がそういうことを言っているのですか。

深沢：いえ、これはフランス政府が禁止しています。ですから原則としてはできない。もっとも実態としては、数は多くないけれども、ときおり結婚する例があり、例えばアレppoでは、現地のマロン派キリスト教徒との結婚がみられます。他にギリシア人、これが正教徒であるかカトリックであるかわからない場合もありますが、さらにアルメニア人女性と結婚した例があります。ただいずれにしても、ではなぜ禁止したのかという理由は、オランダの場合は知りませんが、フランスの場合には、基本的にフランス商人の「レヴァント化」、つまり婚姻や土地所有によって現地社会に同化し、レヴァント社会との結びつきの方がフランス本国との結びつきよりも強くなるのを防止することが、本国政府の意図だったと思います。それと同じようなことが、例えばインド洋や東アジアでも考えられたのかどうか。

羽田：バタフィアについてはやはり同じようなことがあって、現地社会への同化をおそれるためにオランダ人の女性を連れてきて、彼らの血を守るという意識はあったようですね。しかし、インドやペルシアについては、まだ何もわかっていません。だからこそ、これから地道に文書を読んで行かねばならないと思っています。一人ではなかなか難しいので、誰か同じ道を歩む人がいるとよいのですが…。

私のゼミでは、今年度からイギリスの東インド会社の文書（バンダレ・アッパース商館日誌）を読むようになったので、西洋史の方や、駒場の地域文化研究の学生が何人か出席して下さると、それこそ学問的な意味での「地域間交流」ができるのですが…。ただ、イラン史を志して私のゼミに出る学生は、「先生はなぜペルシア語史料を読まないのか」と不満に思っているかもしれませんね。若いうちはまず各地域の基本的な史料をきっちり読んで、それから徐々に視野を広げて行く方がよいのかもしれませんが。それにしても、私の場合は視野を広げるのが少々遅すぎました。

文化史としての異文化交流・異文化接触史研究…フリーメイソン史の可能性

堀井：深沢先生の方の最近興味をお持ちのテーマについて、お話しいただきたいのです

が。

深沢：あ、そうですか。羽田先生のお話をうかがっている間に、自分のことを忘れていました。それでお話を戻しますと、「地域間交流史の諸相」という研究会が三年間続き、その総仕上げの研究会を、九州でやりました。そのときに長崎に行って

...

羽田：出島でやりましたよね。

深沢：そう、現在の出島、これは大変みごとに復原されていますので、まだいらしたことの無い人はぜひ見に行っていたきたいと思えますけれども、この復原された出島の建物の一つで、研究会をやったんですね。もちろん羽田さんが中心になって、この研究会を三年間の総括にしたんですけれども、その場で私はこういうことを申し上げました。つまり国際シンポジウムのタイトルとして「港、商人、異文化接触 Ports, merchants and cross-cultural contacts」というテーマを立てましたが、これを仮に歴史研究の分野または領域として設定してみると、大雑把に言えば歴史地理学と社会史と文化史とに対応させることができる。この三年間の研究で、日本の港町も含めて、現地を観察しながら港町を論じるところまではある程度やってきた。それから商人についても、いろいろな研究者の方が参加されて論じる機会があった。ただし、異文化接触または異文化交流という本来の意味での文化史の領域については、それほど正面から論じてこなかったのではないか。例えば港町における宗教問題や、多様な文化的要素の衝突の問題については、まだ未踏の領域として残されているのではないか。そう申し上げました。それは研究会全体についての感想であると同時に、私の自己批判でもあったわけで、自分自身が関心を持ちながら、まだ実現できていない領域だと、その時点で考えたわけです。

したがって私自身の研究は、その後この文化史の領域、あるいはもう少し広く、社会文化史の領域に集中しつつあります。現在この分野で特に関心を持っているテーマが、はじめに触れたフリーメイソン史であり、その理由の一つは、先ほども議論した宗教社会史、つまりヨーロッパはいかにして宗教対立の時代から宗教平和と寛容の時代へと移行するかを考えると、この歴史的転換点にフリーメイソンが位置することです。

もう一つの理由は、港町の都市社会における社交形態すなわちソシアビリテとしての重要性です。このソシアビリテという概念については、それを「社会的結合」一般として、親族構造や地域共同体まで拡張しない方がいい。ソシアビリテは本来、人が自発的に取り結ぶ関係、とりわけ功利的な目的よりも交際や親睦を第一義的な動機とする組織、つまり社交組織を念頭において考えるのが適切だと思います。この宗教寛容とソシアビリテの両者が交わる場としてのフリーメイソン問題に、ますます強く惹かれつつあります。興味を持ったきっかけは、18世紀のマルセイユ、ボルドー、ラ・ロシェルなどの商人社会史を勉強していて、それらの港町でフリーメイソンがいかに広く普及し、商人層の社交形態として本質的な意味を持ったかに気づいたことです。そこからいろいろな関心が派生してまいりました。例えば今年度で終了する科学研究費補助金「宗教的寛容と不寛容の生成・展開に関する比較史的研究」の研究会、羽田さんにもご参加いただいたこの

研究会で報告したことなのですが、プロテスタンティズムとフリーメイソンの関わり、特にいわゆるユグノのディアスポラ、その亡命コミュニティ内部での思想的な展開や進展と、フリーメイソンの発生との間に、内面的連関がある。フリーメイソン生成期の指導者の一人にジャン・テオフィル・デザギュリエという人がいますが、この人は亡命ユグノでした。1685年のナント王令廃止後、ラ・ロシェルの港町からイギリスに亡命し、そこでカルヴァン派からイギリス国教会信徒へ改宗して、国教会の牧師になります。このデザギュリエが、同じくプロテスタントでスコットランド出身のジェイムズ・アンダーソンという長老派教会の牧師と共に指導的な役割を演じ、いわゆる『アンダーソン憲章』と言われるフリーメイソンの創立文書の作成に携った。この『アンダーソン憲章』に示された根本的な理念の一つは、宗教的な差別を超えた人々の連帯、または宗派間対立を超えた共通の宗教という理念です。それが18世紀初頭のロンドンに出現したのはなぜかについては、研究者のあいだで議論があるわけですが、少なくともそれを成立させた重要なファクターとして、亡命ユグノを含む当時のプロテスタンティズムの内面的変化があった。ロッテルダムを中心とするオランダの亡命ユグノの思想的変転、これは有名なピエール・ベルを中心に進行しますが、そういうプロテスタントの新思潮を含めて、17世紀末から18世紀に至る思想的転換の現象形態としてフリーメイソンを考えております。

それからもう一つは商人、正確に言うとと貿易商人が、その職業の性格においてコスモポリタンであり、事業のために絶えず国境を越え、地域を超えた交流と連帯を必要としている。フリーメイソンがそれに適合する組織を持ち、したがって商人は、積極的にフリーメイソンの組織を利用すると同時に、自分の内面的アイデンティティをそこに再発見するという意味を持っていた。18世紀は、ヨーロッパ内部で人間の流動性が高まった時代だと思います。例えばカザノヴァ、それからモーツァルトの歌劇の台本を書いたダ・ポンテ、南ネーデルラント出身のコスモポリタンな知識人であるリーニュ公、あるいはカリョストロのような詐欺師まがいの人物も含めて、ヨーロッパ中を駆け巡った人たちが18世紀には多い。ですからヴォルテールの『カンディード』という小説が、ウエストファーレンから始まって、オランダやポルトガルに行き、スペインから新大陸に渡り、またフランスに戻って、最後はたしかオスマン帝国の片隅で終わると思いますが、そうやってヨーロッパと世界を股にかけて移動して歩く行動様式が広まった時代です。そういう流動性の高い社会の中で、それを自らの職業と結び付けて実現したのは、やはり商人層だろうと思います。

つまり様々な宗教を信じる人々を差別なく受け入れ、それを共通の普遍的友愛の中に取りこむ社交形式、あるいは社会理念。そしてヨーロッパ中を移動し、移動する先々で人々との交流を実現する組織、つまりコスモポリティズム。言い換えれば他者性と広域性、この二つを内部で消化しながら新しい人と人との交流のあり方を考えようとした。それを理念化し、組織化しようとした運動として、18世紀におけるフリーメイソンは、もう少し西洋史家が真剣に取り組むべき研究テーマではないかと考えるようになりました。少なくとも私が知る限り、日本の西

洋史家でフリーメイソンを正面から研究した人はいないのではないかと。私の見落としだったらいけないんですけども、どうも見当たらない。少なくともフランス史に関する限り、私は知りません。そこでこのフリーメイソンというプリズムを通して、18世紀ヨーロッパとフランスの社会史をもう一度捉えなおしてみたいと考えています。

ところでこの分野の研究をするには、今は非常に有利な環境にあります。なぜかと言いますと、フランスのフリーメイソン文書は長らく二つに分割されていました。それらはいずれも第二次大戦中にドイツ軍によって没収されたもので、その一部は後にフランス国立図書館 *Bibliothèque Nationale* の手稿文書部におさめられて現在に至ります。これがいわゆるフリーメイソン文書 *fonds maçonniques* と言われるもので、それまではパリに本部のある大東方会 *Grand Orient de France* に保管された非公開文書でした。ところがそれは一部分にすぎず、19世紀以降の文書の大部分は、ドイツ軍がドイツに持ち去り、さらに第二次大戦末期にソ連軍が押収し、モスクワに持って帰りました。その結果、50年以上の間文書はモスクワに眠っていました。それがフランス政府と新生ロシア政府との交渉によって、2000年末にフランスに返還されたのです。したがってこれは全く新しい文書群で、現在パリの大東方会本部の図書館に収められています。私も昨年の9月に行って、初めてそのカタログを参照しましたが、かなり膨大なもので、ドイツ軍が関心を持ったのは時代的に新しい部分だけと言われていましたが、実際には18世紀のものも大量に含まれていて、例えばボルドーやラ・ロシェルのような港町に関する文書が含まれています。そういう新しい史料群がようやく一般の研究者にもアクセス可能になったという意味でも、この研究分野は一つの有望株です。もちろん19-20世紀については、この大東方会文書が今回初めて参照できるようになったわけですから、現代史も含めてこのテーマは大きな可能性を持っている。さらにフリーメイソンは、19世紀以降いわゆるイスラーム圏も含めて世界各地に伝播してまいりますので、その意味でも一つの地域間交流史の研究素材として、このテーマを考えることができるかもしれない。そんな風にいま考えているところです。

羽田：最後のところでイスラーム圏も含めて広がったとおっしゃいましたが、フリーメイソンはいま世界中にどの位存在しているのですか。

深沢：世界中にあります。現状を言えば、現在フリーメイソンの大多数は、南北アメリカ...

羽田：アメリカですか。

深沢：ええ。

羽田：ヨーロッパ独自のものという風にはならないわけですね。歴史的にはもともと...

深沢：ヨーロッパ起源ですが。

羽田：ヨーロッパと言っても英仏ですか。

深沢：起源がどこにあるかというのは大変難しい問題ですが、少なくとも組織として誕生したのはイングランドですね。

羽田：ポーランドとかチェコといった東欧にも広がるのですか。

深沢：ええ、プラハには非常に早く入っています。それからロシアのサンクトペテルブ

ルクにも、既に 1731 年に入っていますね。

羽田：イスラーム圏という場合、具体的には、オスマン帝国は入っていますか。

深沢：オスマン帝国も含まれます^(註)。いわゆるイスラーム圏のフリーメイソンの実態について私はまだ不勉強ですが、例えば 19 世紀のアルジェリアにあったことはよく知られていて…

羽田：それはフランスが植民地化した後ですか。

深沢：ええ。例えばアルジェリアの都市オランのフリーメイソンに関する研究書が、数年前に出されました。ただもちろん、いわゆる非ヨーロッパ世界にフリーメイソンが浸透していく場合には、はじめはヨーロッパ人の社交組織として広まっていますが。しかし現地の人たちも、19 世紀以降になると加入していきます。

羽田：それでは、深沢さんの研究領域はヨーロッパをはるかに超えて世界中に広がることになりませんか。

深沢：この分野ですでに世界規模で研究している若手の有能な研究者がいて、それがこの 4 月に日本に招待することが決まっているフランス人のピエール＝イヴ・ボルペールという人です。この方の学位論文は『他者と兄弟』、他者とはもちろん外国人や異教徒や異宗派の信徒ですが、それと兄弟、つまりフリーメイソンの会員、この両者の関係を論じた論文で、これはフランスを中心としていますけれども、考察の対象および史料の探索範囲は全ヨーロッパに及んでいる。その問題意識は植民地を含めた世界的な空間に及んでいると言ってもいいと思います。ボルペールさんはその後もたくさん本を書いています。彼の関心は常に世界的な視点でフリーメイソンを論じるころにあると思います。

Section 5： 質疑応答

堀井：ありがとうございました。最後にギャラリーから質問を受け付けることになっております。かなり一般のお話から具体的な研究のお話まで興味深い論点がいくつも出ましたので、いろいろとお聞きしたいことがあると思います。自由にご質問いただけたらと思います。

質問：最初の地域の問題のところの一つ、時間の問題のところでお話の一つと、質問が二つあります。まず一点目で地域の問題のところ、日本人研究者のイスラーム観、西洋タイプのイスラーム観があって、という羽田先生のお話で、それはヨーロッパ人の枠組み設定であって日本人はそれを相対化すべきではないかということをおっしゃっていました。深沢先生は、これは私の考え違いかもしれませんが、日本人研究者としての立場からということ強く意識されるよりは、

(註) この対談の翌日、3月9日夜に、イスタンブルでフリーメイソン会所を標的とする自爆テロがあり、数名の死傷者を出した。事件当時は多数のメイソン会員が参加して集会を開催中だった。翌日の新聞によれば、現在トルコには約1万2000人のメイソン会員がいると推定されている(深沢記)。

さらにそれを超えて、現地の研究者であっても日本の研究者であっても差違のない立脚点を作っていく、というようなお考えをお持ちなのかな、と思うのですけれども、もしそれが正しいのであれば、先ほどの「ヨーロッパ史」という概念の相対化ということについてはどうお考えですか。

羽田：誤解のないように申し上げますと、私は日本人だけがわかるとは考えていません。現地の研究者も同じように考えてくれるといいなと思っています。私の主張は簡単にまとめると、ヨーロッパの中にいる人たちは、無条件に「ヨーロッパ」を想定して「ヨーロッパ」史や「イスラーム世界」史という枠組みを考え、日本人はそれをそのまま受け入れてきたのだけれど、よく考えてみたら、それは彼らに特徴的な世界観の表われにすぎないのであって、私たちが必ずしもそれに従う必要はないということです。「ヨーロッパ」の外にいる日本人だからこのことに気づいたという面はありますが、中にいる人たちにも共有されるべきことだと考えます。

深沢：御質問の意味をよく理解できたかどうか自信がありませんが、私も基本的には羽田さんと同じ考えで、ヨーロッパ人の発想からは出てこない問題提起ができれば、それは日本人研究者の一つの貢献になるだろうと思います。ただし我々日本人さえわかればいい、という議論は成り立たないでしょう。だから地域概念や時代概念も、普遍的なコミュニケーションの道具として考える点で違いはないと思います。もちろん共通する関心のなかにも、ニュアンスの違いはあるはずですが、その場合に「ヨーロッパ」という地域概念をどうするかというご質問ですか。

質問：そうです。

深沢：私自身は「ヨーロッパ」概念を定義する意図はないし、今日ではヨーロッパ的帰属意識の根拠をどこに求めるかは、そこに居住する人々自身にとっても、さほど自明ではないと思います。その意味で19世紀的なヨーロッパ的世界像を批判するだけでは、もはや充分ではないでしょう。昨年秋に「作品における他者」を論題とするフランス文学国際シンポジウムがあり、私も「近世フランス史における他者の受容と排除」というテーマで発表しましたが、その中でも述べたように、「他者」を定義することと「自己」を定義することとは、実は同じ意識作用です。つまり他者の存在を意識して、それを定義し、それを受容したり排除したりする作用に並行して、それに対立する自己を定義し、自己の帰属範囲を定める作用が起こる。ところでこの意識作用は、それぞれの置かれた時代的文脈や環境によって多様に変化しうると思います。たとえばある時期にヨーロッパに居住する人々の一部が、なによりもカトリック教会に属するキリスト教徒として自己を定義した場合には、それに対立する他者はムスリムに限らず、ヨーロッパ諸地域に居住するユダヤ教徒、ソツィーニ派（反三位一体派）の異端、あるいはカルヴァン派のプロテスタントを含みます。この場合には、宗教的な基準が自己と他者の区別に決定的な影響をおよぼす。とくに16世紀後半から17世紀末までは、この区別がおそらく決定的に重要だったと思います。ですからそういう時代に「ヨーロッパ」という言葉と観念があったとしても、それだけを取り出して集合的運命の枠組みやアイデンティティの根拠とするのは適切でないでしょう。同じくこれもよ

く言われることですが、自らをフランス人と考えるか、それともブルターニュ人あるいはプロヴァンス人と考えるのか。ドイツ人の場合なら自分をドイツ人と考えるか、それともハンブルク人やバイエルン人であると考えるか。これはどちらが真理だったというよりは、各人または集団の置かれた多様な対立や関係のコンテキストの中で、ある時には一方の意識が肥大し、他方の意識が縮小するという関係をたどると思います。ですから「ヨーロッパ史」概念の相対化は、それ自体普遍的な問題であり、研究主体が日本人であるか西洋人であるかに直接に関連づける性質のものではないと考えています。

堀井：よろしいでしょうか。では二点目。

質問：先ほど、文化史であるとか、生活に浸透していたものとして、というようなことをおっしゃっていましたがけれども、ちょうど昨年、吉見俊哉先生（東京大学社会情報研究所）が『カルチュラル・ターン』という本を出されて、その中で日常生活の中に通底していた文化だとか文化的なコードといったものに着目して研究を進めていくことは、法学であるとか経済学であるとか、従来の社会科学の枠組みを超えて議論をつながらせうる、と書いていらっしゃるんですけども、そういうところで先生方のお話とつながりうるのかなと思いました。現時点では日本史ですとか、歴史の中での枠組みを超えるところで活動なさっていると思うんですけども、歴史学を越えたところの研究、研究者とつながっていく可能性についてはいかがですか。

深沢：一般論として言えば、日常生活史とか文化史とかの問題を超えて、歴史学と隣接諸科学との関係をどう考えるかということになりますね。これは20世紀初頭以来、歴史学がずっと抱え込んできた問題であり、日常性や文化生活に限られた話ではないでしょう。20世紀初頭以来、歴史学に対して繰り返しなされた非難・攻撃はほぼ共通しています。つまり歴史家は史料に束縛されており、経験的な事実を経験的に確認するだけで、その背後にある人間社会の論理構造や法則性や基本原理を何も明らかにできないという非難です。例えばデュルケーム社会学や、後のレヴィ・ストロースの構造人類学の立場による批判は、つねにこの方向からなされてきました。ですから日常性や文化についても、歴史学の経験的手法を超えて、一般性のある文化学の体系を構築すべきだという議論は出てきても当然です。この種の論争では、たしかに歴史学の旗色はいささか悪くて、近年の歴史学界で議論の対象になり、受容されたり批判されたりした一般理論の多くは、歴史家でない人たちから提示されています。たとえば人類学者のレヴィ・ストロース、哲学者のミシェル・フコ、またフランスの歴史家が好んで引用し、今でも強烈な影響力をもつ社会学者ピエール・ブルデュー、アフリカ研究から出発した社会学者イマニュエル・ウォラステインなどがそうですし、さきほど名前が出たジャネット・アブー・ルゴドも社会学者です。これらの隣接科学から様々な批判や挑戦がなされ、歴史学はその対応に追われてきた。これは近年の言語論的展開をめぐる議論も同じだと思います。ですから日常性や文化生活の問題についても、歴史学が隣接科学、たとえばカルチュラル・スタディーズなどの議論から学ぶのは悪いことではないでしょう。しかしそれにより歴史家の観察力が曇らされるようでは、かえ

って有害です。歴史家は隣接科学とたえず交流しながらも、それらの理論的前提から自由な立場を保持する必要があり、そこに歴史家の存在理由があると思います。

羽田：いま、東大の中で Asian Studies Network (ASNET) というバーチャルなネットワークを作っているのですが、これは要するに、「アジア」をキーワードにして、これと何らかの形で接点を持っている人は皆そこにつながって情報を共有できるようにしようという試みです。現在、東大内部でアジアに関わる研究者にお願いしてインタビューを進めており、研究や授業の内容などをホームページ (<http://www.asnet.ioc.u-tokyo.ac.jp>) に順次掲載しています。このインタビューによってわかってきたことは、理系の研究者と一緒に仕事をするとしたら、「環境」に関係するテーマしかないのではないかということです。「環境の歴史」、あるいは広い意味での「生態の歴史」かもしれないけれども、そういうテーマなら、歴史研究者と理系の研究者との間にも共有できる関心があるように思います。いま深沢さんがおっしゃったように、社会学、政治学、経済学などの社会科学とは、かなり前から相互の乗り入れが行なわれているので、これから可能性があるとするれば、むしろ理系の学問だと思いますね。

堀井：他にございませんでしょうか。それでは、もう随分時間が超過しましたのでこれで終わりたいと思います。長時間にわたっていろいろ興味深いお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。

2004年3月8日 於 Aux Délices de Hongo
協力：坂野正則・館葉月・クリオ編集委員

羽田 正 (はねだ まさし)

1953 年生まれ。1983 年パリ第 3 大学第 3 課程博士号 (イラン学) 取得。京都橘女子大学文学部助教授、東京大学東洋文化研究所助教授を経て、1997 年より東京大学東洋文化研究所教授。1996 年、2002 年、ケンブリッジ大学東洋学部客員研究員、2000 年フランス CNRS 客員研究員。

著書・編著

- 1987 *Le Chah et les Qizilbas. Le système militaire safavide*. Berlin (Klaus Schwarz Verlag).
 1994 『モスクが語るイスラム史 — 建築と政治権力』中央公論社
 1996 『シャルダン『イスファハーン誌』研究 — 17 世紀イスラム圏都市の肖像』羽田正 (編著) ; 佐々木康之 (訳) 東京大学東洋文化研究所
 1999 『勲爵士シャルダンの生涯 — 17 世紀のヨーロッパとイスラーム世界』中央公論新社

編著・共編

- 1991 羽田正; 三浦徹 (編) 『イスラム都市研究 — 歴史と展望』東京大学出版会
 1994 HANEDA Masashi; MIURA Toru (eds), *Islamic Urban Studies: Historical Review and Perspectives*, London, New York, Kegan Paul International.
 1998 永田雄三; 羽田正 『成熟のイスラーム社会 (世界の歴史 15)』中央公論社
 2000 『イスラーム・環インド洋世界: 16-18 世紀 (岩波講座世界歴史 14)』岩波書店
 2002 『岩波イスラーム辞典』大塚和夫; 小杉泰; 小松久男; 東長靖; 羽田正; 山内昌之 (編) 岩波書店

論文・論評

- 1978 「サファヴィー朝の成立」『東洋史研究』37-2
 1984 「コルチ考: 16 世紀イランの近衛兵制度」『史林』67-3
 1984 「シャー・アッパースの改革とコルチ」『西南アジア研究』23
 1984 "L'évolution de la garde royale des safavides", *Moyen Orient & Océan Indien*, 1.
 1985 「後期イスラム国家の支配: サファヴィー朝の場合」森本公誠 (編) 『講座イスラム 2』
 1987 「フーザーニー家の人々: 東方イスラム世界における一家の歴史」『史学雑誌』96-1
 1987 「メイダーンとバグ: シャー・アッパースの都市計画再考」『橘女子大学紀要』14
 1989 "La famille Huzani d'Iсфаhan (15e-17e siècles)", *Studia Iranica* 18-1.
 1989 "Gazaniyya in Tabriz.", *Urbanism in Islam: The Proceedings of the International Conference on Urbanism in Islam (ICUIT), Oct. 22-28, 1989*, 2., Tokyo.
 1989 「異なる地域の都市の比較は可能か — イラン文化圏都市の構造」『イスラムの都市性・研究報告 研究会報告編』9 文部省科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」事務局
 1990 "Maidan et Bag. Reflexion a propos de l'urbanisme du Sah 'Abbas." A.Haneda ed., *Documents et archives provenant de l'Asie centrale: actes du Colloque franco-japonais organise par l'Association franco-japonaise des etudes orientales affiliee a la Maison franco-japonaise de Tokyo et l'Universite de Paris III*, Kyoto, Association franco-japonaise des etudes orientales.
 1990 「イラン民族の生活文化」小玉新次郎; 大沢陽典 (編) 『アジア諸民族の生活文化』阿吽社

- 1990 「「牧地都市」と「墓廟都市」 — 東方イスラーム世界における遊牧政権と都市建設」『東洋史研究』49-1
- 1990 「ティムールとサマルカンド」『月刊しにか』1-4 大修館書店
- 1991 「スルタン・スレイマンとシャー・アッバース：ムスリム君主の墓廟観」『歴史と地理』219 山川出版社
- 1991 「シャー・アッバースとアルメニア人」岡崎正孝（編）『中東世界』世界思想社
- 1992 「1676年のイスファハーン — 都市景観復元の試み」『東洋文化研究所紀要』118
- 1992 「イラン・イスラーム世界の都城 — イスファハーンの場合」『学術月報』45-5
- 1993 「シャルダン『ペルシア旅行記』の特徴」『シャルダンペルシア紀行』岩波書店
- 1993 「東方イスラーム世界の成立」鈴木董（編）『パクス・イスラミカの世紀』講談社
- 1995 「イスラム建築の魅力」『Next Age』37
- 1995 「帝国の変動 西アジア・インドのムスリム国家体系」歴史学研究会（編）『近代世界への道 — 変容と摩擦（講座世界史2）』東京大学出版会
- 1995 「ティムール・飽くなき征服者」「アッバース一世・不可思議な専制君主」佐藤次高（編）『人物世界史4 東洋編』山川出版社
- 1996 "The Character of the Urbanisation of Isfahan in the Later Safavid Period.", C.Melville ed., *Safavid Persia: the history and politics of an Islamic society*, London.
- 1996-1997 「イスファハーンは世界の半分(1)-(4)」『歴史と地理』489,492,495,498 山川出版社
- 1996 「他者認識とパラドックス — ヨーロッパとイスラム世界」『UP』284
- 1997 "Emigration of Iranian Elites to India during the 16-18th centuries.", *Cahiers d'Asie Centrale*.(L'Heritage timouride. Iran-Asie centrale-Inde. XVe-XVIIIe siecles).
- 1997 "The Pastoral City and the Mausoleum City.", SATO Tsugitaka (ed.), *Islamic Urbanism in Human History*, London & New York (Kegan Paul International).
- 1998 「アッバース大帝の夢：世界の半分イスファハーンの建築遺構」『文化遺産』6 島根県並河万里写真財団
- 1999 「羽田亨」『20世紀の歴史家たち 日本編（下）』刀水書房
- 1999 「旅行者の見た古代イランの遺跡 — シャルダンとデュラフォア」『文化遺産』8 島根県並河万里写真財団
- 2000 「サファヴィー朝とイスファハーンの栄光（イスラーム時代の西アジア — トルコ民族の制覇と都市文化の発達）」問野英二；竺沙雅章（監）『西アジア史』同朋舎
- 2001 「バンドレ・アッバースとペルシア湾海域世界（特集 港町と水陸交通 — 地域論の射程から（2））」『歴史学研究』757
- 2002 「「イスラーム世界」史の解体」別冊『環』4 藤原書店
- 2002 「ペルシアと日本の王権と儀礼 — ヨーロッパ人旅行者による観察」『天皇と王権を考える（岩波講座 王権と儀礼5）』岩波書店
- 2002 「東方イスラーム世界の形成と変容」永田雄三（編）『西アジア史2 イラン・トルコ』山川出版社
- 2003 「都市の壁 — 前近代ユーラシア王都の都市プランと象徴性」東京大学東洋文化研究所（編）『アジア学の将来像』
- 2003 「ジャン・シャルダン『ペルシア旅行記』」岡本さえ（編著）『アジアの比較文化』1 名著

解題』科学書院

- 2003 「ヨーロッパとイスラーム世界? : 二項対立的世界史叙述の克服にむけて」谷川稔(編)『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社
- 2003 「東洋学・歴史学とイスラーム地域研究」佐藤次高(編)『イスラーム地域研究の可能性』東京大学出版会

深沢 克己 (ふかさわ かつみ)

1949年生まれ。1984年プロヴァンス第1大学第3課程博士号(歴史と文明)取得。九州大学文学部助教授、同教授を経て、1995年より東京大学大学院人文社会系研究科教授。1997年ボルドー第3大学歴史研究科客員教授。

著書

- 1987 *Toilerie et commerce du Levant au XVIIIe siècle. D'Alep à Marseille*, Paris: Editions du CNRS.
- 2002 『海港と文明 — 近世フランスの港町 —』山川出版社

編著

- 2002 『近代ヨーロッパの探究9 国際商業』ミネルヴァ書房

共著

- 1999 近藤和彦編『西洋世界の歴史』山川出版社

論文・論評

- 1979 「アドリアン・ド・ガスパランの農学思想 — 19世紀南フランス農業の発展方向との関連で —」『土地制度史学』84
- 1985 「レヴァント貿易と綿布 — 18世紀マルセイユ商業史序説 —」『土地制度史学』109
- 1986 「レヴァント更紗とアルメニア商人 — 捺染技術の伝播と東西貿易 —」『土地制度史学』111
- 1987 "Commerce et contrebande des indiennes en Provence dans la deuxième moitié du XVIIIe siècle", *Annales du Midi*, tome 99-no.178.
- 1989 「18世紀のレヴァント貿易とラングドック毛織物工業 — アレッポ向け毛織物輸出の変動をめぐって —」『土地制度史学』125
- 1990 「オスマン帝国期の国際商業都市アレッポ」『イスラムの都市性・研究報告』研究報告編59
- 1991 「18世紀のフランス王立アフリカ会社とピアストル銀貨」『イスラムの都市性・研究報告』研究会報告編26
- 1994 「ルー商会文書の為替手形 — 18世紀金融技術の基礎研究 —」『史淵』131
- 1995 「十八世紀のフランス=レヴァント貿易と国際金融(上) — ルー商会文書の為替手形 —」『史淵』132

- 1996 「十八世紀のフランス=レヴァント貿易と国際金融（下） — ルー商会文書の為替手形 —」
『史淵』 133
- 1996 「18世紀フランス国際商業と貨幣流通」『MUSEUM KYUSHU — 文明のクロスロード』 51
- 1997 「近代フランス史研究における海の視点について」地中海学会 20周年記念『地中海学の20年』 地中海学会
- 1999 「ヨーロッパ商業空間とディアスポラ」『商人と市場 — ネットワークの中の国家 —（岩波講座世界歴史 15）』 岩波書店
- 1999 「レヴァントのフランス商人 — 交易の形態と条件をめぐって —」『ネットワークのなかの地中海（地中海世界史 3）』 青木書店
- 1999 "Marseille, porte du Levant. Un essai de comparaison", in : *Actes du 50e Congrès de la Fédération historique du Sud-Ouest, tome II, Bordeaux, porte océane, carrefour européen, Bordeaux, Fédération historique du Sud-Ouest.*
- 2000 「フランス港湾都市の商業ネットワーク」辛島昇・高山博（編）『地域の成り立ち（地域の世界史 3）』 山川出版社
- 2000 "Les lettres de change et le commerce du Levant au XVIIIe siècle", in : Silvia Marzagalli et Hubert Bonin (dir.), *Négoce, ports et océans XVIe-XXe siècles.* Pessac : P. U. de Bordeaux.
- 2001 「フランス革命初期（1790年）における地中海商業ネットワーク — 為替手形による商人間コミュニケーション —」『西欧の歴史世界とコミュニケーション』平成10-12年度科学研究費補助金・基盤研究B・研究成果報告書
- 2001 「近世フランスの河口内港 — 港町のトポグラフィ —」『歴史学研究』 757
- 2001 「ヨーロッパ移民史の視点」『史学雑誌』 110-8
- 2002 「比較史のなかの国際商業と国際秩序」『社会経済史学会創立 70周年記念・社会経済史学の課題と展望』 有斐閣
- 2003 "Topographie et urbanisme de Marseille au XVIIIe siècle. Essai d'histoire comparée", in: Institut de recherches sur les civilisations de l'Occident moderne. *Évolution des mondes modernes (Séminaires de D.E.A., année 2001-2002).* Paris: Université de Paris-Sorbonne.
- 2003 「港町の歴史的景観とその未来 — フランスの事例から —」日本港湾協会『港湾』 80
- 2004 「国際商業史と比較経済史 — 馬場哲氏の書評に応える —」『史学雑誌』 113-1

翻訳・監修

- 1996 ミシェル・モラ・デュ・ジュールダン『ヨーロッパと海』 平凡社
- 1997 ポール・ビュテル『近代世界商業とフランス経済 — カリブ海からバルト海まで —』（共訳） 同文館
- 1999 アンドレ・ジスベール／ルネ・ビュルレ『地中海の覇者ガレー船』 創元社

堀井 優（ほりい ゆたか）

1965年生まれ。2002年東京大学大学院人文社会系研究科博士号（文学）取得。2004年より広島修

道大学経済科学部助教授。

論文・論評

- 1994 「16世紀前半のオスマン帝国とヴェネツィア — アフドナーメ分析を通して」『史学雑誌』103-1
- 1996 「15世紀末・16世紀前半の東地中海世界におけるイスラーム国家と海上法」『比較法文化論集』1
- 1997 "The Ottoman Maritime Expansion and the Late Mamluk-Frankish Relations (Working Paper for International Conference: "Le Jihad maritime dans l'histoire arabo-islamique," Bouregreg Association (Sale, Morocco), 30 May-2 June 1997)", *T.E.A.S. Bulletin* 1.
- 1997 「オスマン朝のエジプト占領とヴェネツィア人領事・居留民 — 1517年セリム1世の勅令の内容を中心として」『東洋学報』78-4
- 1997 「東地中海世界におけるイスラーム国家と海上秩序 — 1482-1521年」『比較法史研究』6
- 1997 "Venetian Consul and Residents in Egypt under Ottoman Conquest", Francesca Lucchetta (ed.), *Venezian in Levante, musulmani a Venezia (Quaderni di Studi arabi, Supplemento al n. 15)*.
- 1998 「イスラーム国家領域内のヨーロッパ人居留民社会 — 16世紀前半のエジプトを例に」『歴史学研究』716
- 1999 「マムルーク朝末期の対フランク関係とアレキサンドリア総督職」『オリエント』41-2
- 2002 「オスマン帝国とヨーロッパ商人 — エジプトのヴェネツィア人居留民社会」深沢克己(編)『近代ヨーロッパの探究9 国際商業』ミネルヴァ書房
- 2002 「エジプトの聖者の祭り」地中海学会(編)『地中海の暦と祭り』刀水書房
- 2003 "The Mamluk Sultan Qansuh al-Ghawri (1501-16) and the Venetians in Alexandria", *Orient* 38.
- 2003 「地中海」「十字軍」「歴史家」「王朝」山内昌之(編)『イスラームとは何か』新書館